

甲骨文の非對格動詞から見る「不」と「弗」の否定機能差異*

戸内 俊介

はじめに

上古中國語の否定詞は多種多様であるが、その中でも、聲母（音節頭子音）が *p- で始まる「不」と「弗」と、聲母が *m- で始まる「毋」と「勿」という 2 系列が注目されてきた。これらの分用については従来、様々な説が提示されてきたが、現代における研究の嚆矢となったのは、丁聲樹 1935 である。

「弗」と「不」は従来、否定の強調度の違いによって使い分けられるとされてきた。しかし丁聲樹 1935 はこれを退けつつ、「弗」は目的語が省略された他動詞或いは介詞に用いられる一方、「不」は自動詞或いは目的語をとる他動詞に用いられることを指摘した上で、

- (1) “弗”字似乎是一個含有“代名詞性的賓語”的否定詞，略與“不之”二字相當，“不”字則只是一個單純的否定詞。

（丁聲樹 1935：991－992）

〔「弗」は代名詞的目的語を内包した否定詞で、およそ「不之」に相當し、「不」は一方で單純な否定詞であるようだ〕

* 本稿は平成 28 年度～平成 30 年度日本學術振興會科學研究費補助金若手 (B) (研究課題名：上古中國語における否定詞體系の通時的研究—出土文字資料を中心に—、課題番號：16K16836、代表：戸内俊介) による研究成果の一部である。また、本稿は 2016 年にベルリン・フンボルト大學で開催された第 9 屆國際古漢語語法檢討會 (isacg-9) にて口頭発表したものが元になっており、本誌掲載に当たり大幅に改稿した。研究報告の場では、Edith Aldridge 氏 (ワシントン大學)、宋亞云氏 (北京大學) から貴重な意見をいただいた。この場を借りて感謝申し上げたい。

という新たな見解を提示した。

續いて呂淑湘 1941/1999 は、

- (2) “母”與“勿”之用法不同，“母”爲單純式，“勿”爲含代名詞止詞式，略與“母之”、“母是”相等。其區別與“不”與“弗”之區別平行，“母”與“不”相當，“勿”與“弗”相當。（呂淑湘 1941/1999：79-80）
 [「母」と「勿」の用法の違いは、「母」が單純型である一方、「勿」が代名詞目的語内包型で、およそ「母之」、「母是」に相當するという點にある。その區別は「不」と「弗」の區別に平行し、「母」は「不」に相當し、「勿」は「弗」に相當する]

として、「勿」と「母」の分用も「弗」と「不」に平行すると見なす。

さらに、Boodberg 1934/1979：430-431 は「弗 *piuət < 不 *piuə + 之 *ti」という合音説を提起し、引き続き Graham 1952 は「勿」も「母之」の合音であるとの説を展開した。

以上の「弗 = 不之」と「勿 = 母之」(以下、「併合説」¹と稱する)については現在でも幾ばくかの反論はあるものの、大西 1988、魏培泉 2001 が證明するように、現在では首肯される傾向にある。また楚簡などの同時代の出土資料からも併合説は支持される(周守晉 2005)。

以上は、概ね上古中期中國語²に關わる状況であるが、一方で、上古前期の否定詞の體系についてはいまだ不明な點が多い。そもそも、甲骨・金文・『尚書』といったより古い文獻では併合説が成り立たないことが、呂淑湘 1941/1999：82-83 や周法高 1953/1972：44 らによって早くから指摘されている。

例えば、甲骨文にも「不」、「弗」、「勿」³、「母」といった否定詞が見えるが、

¹ 「併合説」は魏培泉 2001 の用語“併合説”に基づく。

² 本稿では松江 2010：iii により、上古中國語の時代區分を以下のように定める。

上古前期中國語：殷、西周時代

上古中期中國語：東周（春秋戰國）時代

上古後期中國語：秦、前漢時代

³ 裘錫圭 1979/2012a：17 は「勿」は時代の前後で字體が變わると考えている（第一期から第二期前期：「勿」、第二期後期から第五期：「弅」）。本稿でも裘錫圭 1979/2012a に従い、基本的に「勿」と「弅」を同一の語（word）の異體字と見なす。なお、甲骨文を五期に分けたのは董作賓 1933/1962 に始まる。董氏は世系・稱謂・貞人などの基準によって第一期：武丁、第二期：祖

甲骨文の「弗」や「勿」はしばしば目的語を伴っており、否定詞そのものが目的語代名詞を内包しているとは見なし難い（以下、二重の下線部は否定詞を、一重の下線部は目的語を示す）。

(1) 我使弗其戔（翦）方。 (合集 6771)

〔我が武官は方國を討ち滅ぼすことができないだろう〕⁴

(2) 余勿伐不。 (合集 6834)

〔私は不國を伐つまい⁵〕

甲骨文の否定詞の分用について、Takashima 1988 は、その音節頭子音によって「不」/「弗」を *p-type、「勿」/「毋」を *m-type と分類しつつ、以下のような解釋を提示する。

(3) The *p-type negatives, bu/*pjæg 不 (its shang and qu“tones”disregarded momentarily) and fu/*pjæt 弗, negate verbs whose salient feature is their“uncontrollability”, that is, they negate verbs which can not be controlled by the will of a living Shang.

(Takashima 1988 : 115)

〔*p-type 否定詞「不」*pjæg (上聲か去聲かについては暫し無視する) と「弗」*pjæt は、制御不可という特徴を持った動詞を否定する、言い換えれば、殷側の意志によってコントロールできない動詞を否定する〕

庚・祖甲、第三期：廩辛・康丁、第四期：武乙・文丁、第五期：帝乙・帝辛（紂）に分期した。董氏の斷代研究はいくつかの點で後に修正されたが、大枠は現在でもなお有効である。

⁴『説文』卷三下・卜部に「貞，卜問也」とあることから、曾ては卜辭の命辭は疑問文と理解されるのが支配的であったが、現在、否定的な見解が展開されており、議論となっている。とりわけ歐米では早い段階から、疑問文説に疑義が呈され (Serruys 1974 : 22-23, Keightley 1978 : 29)、その後、Nivison 1989 などにおいて廣く受け入れられている。また、中國でも、裘錫圭 1988/2012 が甲骨文の中に非疑問文があることを論じて以降、沈培 2005 などが追認している。このほか、高嶋 1989 は関連する議論を包括的に扱った論考である。本研究は基本的に、命辭 = 非疑問文との立場を取るため、命辭を疑問文として譯さない。同時に、命辭に前接する「貞」字についても、疑問文を提示するマークとは見なさず、Takashima & Serruys 2010 vol. I : 23 の“(diviner) Y tested [to gain sapience from the numen of the turtle or bone] (貞人が [甲骨の神靈から知恵を得るために] 檢證した)”との解釋に従う。なお、反對意見としては、陳焯湛 1994/2003 がある。

⁵「勿 V」の主語が「王」や一人稱代名詞などの占卜主體側であるとき、「勿」を意志表現「V すまい」として譯す (戸内 2016)。

- (4) *M-type negatives, wu/ *mjət 勿 and wu/ *mjæg 毋, ……these negatives negate verbs whose salient feature is their “controllability”, that is, they negate verbs which must be, or are thought of as being, controllable by the will of a living Shang.

(Takashima 1988 : 118)

〔*m-type 否定詞「勿」 *mjət と「毋」 *mjæg は、……制御可能という特徴を持った動詞を否定する、言い換えれば、殷側の意志によってコントロールできるであろう動詞を否定する〕

謂わば、*p-type 否定詞「不」/「弗」と *m-type 否定詞「勿」/「毋」の差異は、否定する動詞が表す事象を、殷側がコントロールできるか否かにあるということである。加えて Takashima 1988 は、話し手の “will (意思)” の存在を動詞の “controllability (可制御性)” と関連づけつつ、“+ will” を “controllable” な動詞に割り当て、この種の動詞を否定する「勿」を、強い必要性を表す否定詞と見なして、“should not”、“ought not” と譯し、一方、“-will” を “uncontrollable” な動詞に割り当て、この種の動詞を否定する「不」/「弗」を “is not V + ing”、“does not”、“did not”、“will not” と譯す。

「毋」については用例が少なく、異説も出されているが、「不」/「弗」と「勿」の使い分けの基準については、現在のところ上の如き解釋が概ね受け入れられている⁶。

⁶ 但し「勿」が否定する動詞が、殷側がコントロールできる事象であるというのは、飽くまでも命辭においてのみであり、占辭では殷側がコントロールできない動詞を否定する用例も散見される（「命辭」「占辭」等の用語については次注参照）。例えば、

貞：“王弗疾骨。”王固曰：“勿疾。” (合集 709 正) 【賓一】

〔以下の命題について檢證した、「王は骨を病まない」と。王が占って言った、「病まないだろう」と〕

“祖乙弗彘(害)王。”王固曰：“吉。勿彘(害)。” (合集 13750) 【典賓】

〔「祖乙は王を害さない」と。王が占って言った、「吉である。害さないであろう」と〕

己巳卜，敵貞：“允不死。”王固曰：“吉。勿死。” (合集 734 正) 【典賓】

〔己巳の日に卜い、以下の命題について敵が檢證した「允(人名)は死んでない」と。王が占って言った、「吉である。死なないであろう」と〕

このような用法について森賀 2000:10-12 は、甲骨文の「勿」は modal な否定詞として、deontic modality のみならず、epistemic modality の標識も兼ねていたと考える。同時に、多くの言語が、雙方の法表現にしばしば同じ言語形式を用いることも森賀氏は指摘する。なお上記卜辭の譯文は森賀説によって筆者が付したものである。

それでは、「不」と「弗」の否定機能の違いはどこにあるのか。これが本稿の主題である。この問題について、陳夢家 1956/1988 は、

- (5) “不”和“弗”的不同，約有以下各點：(1) “不”可以和“若”結合而成爲一個名詞；(2) “不”與“我”可以相結合而成否定的先置賓語；(3) “不”字常和有關天象氣候的內動詞“雨”“啓”“風”“易日”相結合；(4) “不”所結合的動詞範圍較廣；(5) “不”可以表示已往的事實，如粹 1043 驗辭云“之日大采雨，王不步”是說天大采之時下雨，王未步。(陳夢家 1956/1988：128)

〔「不」と「弗」の違いは、およそ以下の數點にある。(1)「不」は「若」と結合して1つの名詞になりうる。(2)「不」と「我」は連結しつつ「我」は前置目的語となる。(3)「不」はよく天象氣候の自動詞「雨」、「啓」、「風」、「易日」と連結する。(4)「不」が連結する動詞の範圍は比較的廣い。(5)「不」は過去の事實を否定できる、例えば粹 1043 に見える驗辭⁷「之日大采雨、王不步」は「大采（朝）の時間に雨が降り、王はまだ歩いていない」という意味である〕

と記述する。また Serruys 1974 は、

- (6) the negative pu (不) with stative, intransitive or passive verbs
(7) fu (弗) with active-transitive verbs (Serruys 1974：67)

⁷ 甲骨學の特殊な用語として「前辭、命辭、占辭、驗辭」というものがある。「前辭」とは占卜の日時（十干十二支）や貞人（占いの實行者。例えば下例の「敵」）を記した文、「命辭」とは占卜内容を記した文（主に祭祀・戦争・狩獵・天氣・作物の實りなどが占卜される）、「占辭」とは命辭に對しての王の判斷を記した文、「驗辭」とは占卜した事項の結果を記した文である。實際の卜辭に即せば、以下のように説明できる。

甲申卜敵貞：“帚（婦）好媿，嘉。”王固曰：“其佳丁媿嘉。其佳庚媿，弘吉。”

前辭 命辭 占辭

三旬又一日甲寅媿，不嘉。佳女。(合集 14002) 【典賓】

驗辭

〔甲申の日に卜い、敵が檢證した、「婦好の出産は喜ばしいものである」と。王が占って言った、「出産が丁の日であれば喜ばしい。出産が庚の日であれば、弘吉である」と。占卜をした日（甲申）から數えて 31 日目の甲寅の日（第 51 日目）に出産したが、喜ばしいものではなかった。女兒だったのである〕

多くの場合、前辭は冒頭から「貞」字までであり、「貞」字以下は命辭となる。卜辭の大部分はこの前辭と命辭からなる。この他、命辭の後ろやウラ面に「王占曰」として占辭を記すこともある。さらに一部の卜辭は命辭や占辭の後ろに驗辭を記している。但し、前辭・命辭・占辭・驗辭が全てそろった卜辭はさほど多くない。

として、「不」は状態動詞、自動詞、受け身動詞を否定し、「弗」は他動詞を否定する否定詞と見なす。その後 Serruys 1981 は、

- (8) the former (不) used with verbs in stative, intransitive, passive functions, the latter (弗) used for active, transitive, causative roles.

(Serruys 1981 : 342)

〔「不」は状態、自動詞、受け身機能を伴った動詞とともに用いられ、「弗」は動作、他動詞、使役的機能に對し用いられる〕

として、「弗」の否定対象に causative (使役) をも加えた。同時に Serruys 氏は、

- (9) When verbs used in transitive, causative role have personal pronouns as direct or indirect object, the negative reverts to the simple *pu* (不) instead of *fu* (弗).

(Serruys 1981 : 353)

〔他動詞、使役的機能を伴った動詞が直接目的語或いは間接目的語に人稱代名詞をとるとき、否定詞は「弗」から単純な「不」に戻る〕

とも解釋する。なお、もしこの分析が妥当なら、他動詞や使役動詞は「弗」でも「不」でも否定できることになるが、Serruys 氏はなぜこのような重複が生じるのかは具体的に説明していない。

これに對して、Takashima 1988:128-131 は、以下の例を擧げて「不」が自動詞を否定する否定詞であるとの見方を退ける。

- (10) 貞：“足不其隻 (獲) 羌。” (丙編 120 = 合集 190)

- (11) 甲辰卜， 敵貞：“奚不其來白馬。” (丙編 157 = 合集 9177)⁸

さらに Takashima 1988:127 は、「不」と「弗」の違いについて以下のように概括する。

- (12) *bu*/**pjəg* 不 : stative/eventive negative

- (13) *fu*/**pjət* 弗 : non-stative/non-eventive negative

「不」が stative、即ち状態性の否定であるという觀點は、繫辭 (copula) 「佳」⁹ や状態動詞「吉」等が「不」と共起する一方、「弗」と共起しないことか

⁸ 「丙編」は《小屯第二本：殷虛文字丙編》の略稱であり、「=合集」はそれが《甲骨文合集》のどこに再録されているのかを示している。

⁹ 「佳」が copula であるというのは、Takashima 1990 による。

らも支持される。例えば、

(14) 王夢不佳大甲。 (合集 14199)

[王が悪夢を見たのは大甲によるものではない]

(15) 王占曰：“不吉。” (合集 716)

[王が占って言った、「吉ではない」と]

しかし一方で、「不」は動態動詞 (dynamic verb) と共起しないわけではない。上の例 (10) (11) がそれに該当する。このような例について、高嶋 1992 は、

(16) 「獲」という動詞はむしろ「イベント」として殷人に意識されていたのではないかと思う。この文に現れる羌人というものは殷人の祭祀における人身犠牲などに殺戮されたのではあるが、彼らは往々にして手強い敵で有り、家畜とは違い知恵と腕力でおさえつけなければどうにもならない精悍な遊牧民族であった。そのような当時の状況を想定するのが誤り出ないとすると、この例文 [8] (本稿の例 (10): 引用者注) に関しては、「獲」を eventive verb と解釈した方が意味論的には妥当だと思われる。換言すれば、saliency は「動作」よりは「現象」—即ち「獲」ということがおこる「イベント」にある、と言えよう。 (高嶋 1992: 46)

として、「不」は事態性・現象性 (eventive) の否定であるとも見なす。eventive に関して、高嶋 1992 は

(17) 「状態」と「現象」の違いとしては、前者が時間的にある程度継続するのを前提とするが、後者は継続性よりはむしろ瞬間的なイベントとしてとらえたものである。換言すれば、現象をくりかえすと状態になる。その点両者はちかいものと言える。 (高嶋 1992: 489)

として、同一否定詞が stative と eventive にまたがる原因を分析する。

加えて近年、Takashima 2015 では、

(18) On the basis of morphology of the negatives involving the contrast of the rime portion of 弗 **pət* and 不 **pə*, as well as of 勿 **mət* and 毋 **mə*, we have come to the conclusion that the *-*t* can be interpreted as showing a change of “state” into “process”, i.e., the sta-

tive and non-dynamic nature of a verb gets changed to active and dynamic nature of it by *-t. But if it remains stative with the use of 不 and 毋, it should be interpreted in our view as reflecting the aspectual feature of the verb. (Takashima 2015 : 50)

〔「勿」と「毋」のみならず、「弗」と「不」の韻母の對立に關わる否定詞の形態論的原則のもと、*-t 韻尾は「状態」から「過程」への變化を示すものと解釋される、すなわち *-t 韻尾によって動詞の状態的、非動態的性質は動作的、動態的性質へと變化する、という結論を導き出せる。しかしもし動詞が「不」と「毋」の使用で状態性を保つなら、私たちの見解では、それは動詞のアスペクト特性を反映していると解釋すべきである〕

と述べる。

また、雷煥章 1999 は、

- (19) 否定詞“弗”使用於致使直接受詞產生改變之作用力強的及物動詞前；而不及物動詞前之否定詞則使用“不”。然而刻辭中“弗”和“不”均可互用，但是只用於不使直接受詞產生改變之作用之微弱的及物動詞前，例如“邁”和“受”即屬此類動詞。 (雷煥章 1999 : 52)¹⁰

〔「弗」は直接目的語に變化を生じさせる作用力が強い他動詞の前に用いられるが、自動詞の前の否定詞は「不」を用いる。しかし甲骨文では、「弗」と「不」は相互に入れ替えて用いることができる。ただ、これは直接目的語に變化を生じさせる作用が弱い自動詞の前でのみ起こる。例えば「邁」や「受」がこのタイプの動詞に屬する〕

と言う。また「不」の後ろの動詞については、

- (20) 無動詞之意味，而是有形容詞之意。 (雷煥章 1999 : 51)

〔動詞の意味はなく、形容詞の意味を持つ〕

として、やはり「不」を状態性の否定と見なしているようである。

このほか、「不」と「弗」の違いを具體的に記述したものもあり、例えば朱

¹⁰ 本解釋は Djamouri, Redouane (羅端) 氏のシンポジウムでの發表によるものであるとのことだが、筆者は遺憾ながら未見である。

岐祥 1992 : 114 は、以下のように整理する。

表 1 朱岐祥 1992 の分析による「不」と「弗」の對立

	弗	不
1 修飾義類	祭祀、攻伐	農作、天文、出入、生死、王事
2 詞性	多接及物動詞, 其後多有賓語	多接不及物動詞, 少有賓語
3 與一人稱代詞結合形式	弗+V+我	不+我+V
4 句型移位	固定。屬“動——賓”式常格	較不固定, 有“賓——動”式變格
5 被動句式	無被動句	有被動式
6 語氣	較不肯定	較肯定

「1 修飾義類」は「弗」と「不」がそれぞれ共起する動詞を語彙的意味で分類している。「2 詞性」は「弗」は他動詞と共起する一方、「不」は自動詞と共起しやすいという統語論的性質を説明する。「3 與一人稱代詞結合形式」は一人稱代名詞「我」が目的語となる時、「弗」ではそれが前置されないが、「不」では前置されるという統語現象があることを挙げる。「4 句型移位」は3の前置現象に関連して、「弗」は常に目的語が動詞に後置する固定型で、「不」は目的語が時に動詞に前置する非固定型であることを示す。「5 被動句式」は、「弗」が受動文の形式を取らない一方で、「不」が受動文を構成し得ることを指摘する。「6 語氣」は「弗」の語氣は非斷定的である一方、「不」の語氣は斷定的であると解釋している。本稿ではこのうち、後段でも述べるように、「5 被動句式」に着目したい。

張玉金 2006 : 147 は「不」と「弗」の違いについて、表 2 のように、極めて詳細な記述を展開する。

張玉金 2006 はこのように否定詞の記述に多くの紙幅を費やしており、それぞれ具體性の高い議論である。ここではその記述をひとつひとつ取り上げ検証する餘裕はないが、張玉金 2006 においてもなお「不」と「弗」の根本的な相違点については明らかにされていない。

表2 張玉金 2006 による「不」と「弗」の對立

不	弗
它（不）可以跟“弗”一樣，指向其後的主動態及物動作動詞，也可以指向其後的其他動詞，還可以指向其後的作謂語的非動詞（如形容詞、數詞等）	基本上都是指向其後的主動態及物動詞。
由於“不”可以否定在否定範圍內的某些成分而非否定整個命題，因此“不”可以指向句中的狀語部分、補語部分以及賓語中的定語部分	“弗”不能指向這些成分。
由於“不”可指向“唯”、“釁”後的成分，所以“不”語義指向的物件可以在“不”之前，即“不”不但可後指，也可前指。 ¹¹	“弗”只能後指。
由於“不”可以指向句中的某些成分（如補語、賓語中的定語），所以“不”不但可近指，還可以遠指，即在“不”和所指物件之間隔著實詞（如動詞）性成分。	“弗”只能近指。所以即使是主動態及物動作動詞，當它的賓語前置時，在“前置賓語+V”和“前置賓語+V+O”之前，只能用“不”，不能“弗”。“弗”和它所指向的動詞之間，除了一些副詞（主要是“其”，不影響語義指向）之外，不能出現任何實詞性成分。
“不”可以否定零價動詞和一價動詞，也可以否定二、三價動詞。	“弗”之後，一般要出現二、三價動詞，零價動詞和一價動詞一般不用“弗”
如果是表狀態的，就多用“不”否定。當然，如果是不及物動詞，即使是表示動作的，也用“不”否定。	“弗”否定的不但應是主動態及物動詞，而且還應是表示動作的。同樣是主動態的及物動詞，如果是表示動作的、包括外在的動作和心理活動，就多用“弗”否定。
“沒、沒有”這種意義的“不”和“弗”多是對已然的否定，出現在這種“不”和“弗”後的動詞帶有已然性。即使主動態及物動作動詞，當它是“已然”的時候，就呈現為一種狀態，而不再具有鮮明的動作性。正因如此，對“已然”進行否定時，不管其後動詞的狀況如何，都是通常用“不”，很少用“弗”。	“弗”通常否定動作，而很少否定狀態。

¹¹ 張玉金 2006：137 は「不」が前を指向する例として、以下を挙げる。

王占曰：“唯今夕不雨。”

〔王が占って言った、「雨が降るのは今夜ではない」と〕

「不」が「今夕」を否定しているという理解である。

（合集 12396）【典賓】

このほか、Aldridge 2010 は「弗」の併合説に反対しつつ、甲骨文中で「弗」が他動性 (transitivity) の高いコンテキストで用いられていることに踏まえ、「弗」の音節末子音 *t は元来、後続する動詞の有する “causative prefix (使役化接頭辭)” の *s- の反映¹²、すなわち後ろの語の接頭辭 *s- が「不」の接尾辭 *s のようになり、「弗」が成立した (不 *piuə + *s > *piuəs > 弗 *piuət) と推定する (Aldridge 2010)。

Honkasalo 2013 は、「不」は他動性が低く、目的語への影響力を缺いた動詞、すなわち状態、状態變化、氣象現象を表し、“valency-decreasing operation (項減少操作)” を受けた動詞を否定するが、「弗」は他動性が高く、目的語への影響力の強い動詞を否定すると分析する (Honkasalo 2013:67)。且つ、殷に先行する時期、否定詞は「不」のみ存在していたが、「不+之+V」¹³ という目的語前置の語順が頻出することで、「不+之>弗」という否定詞が誕生したと推測しつつ、さらに「弗」が代名詞を内包しているがために、甲骨文中で「弗」が「之」や「我」などの代名詞目的語と共起しないという現象の原因を説明する。また「弗」が他動性の高い動詞を否定する理由として、代名詞目的語をとる文は固より他動性が高く、言語の發展に伴って、「弗」の韻尾 *t は續く動詞が他動詞であることを示すマーカーとなったと考える (Honkasalo 2013:70-71)。

1. 「不」、「弗」と非對格動詞

それでは、「不」と「弗」の分用の動機は何か。既に指摘があるように、「不」が状態性の強い動詞や形容詞を否定するというのは、確かである。また、「弗」が状態性の強い動詞を否定しない、或いは概ね他動詞を否定するという従来

¹² causative prefix の *s- の例として、Aldridge 2010 は以下のような「食」→「飼」の派生を挙げる。

Causative + 食 shi 'eat' => 飼 si 'feed'

/*s- / /*diək- / /*sdjəks /

¹³ 甲骨文の否定文では目的語代名詞が前置される。例えば、

王亥不我求 (咎)。

(合集 7352 正)

[王亥は我が方に災いを下していない (我々に王亥の災いがない)]

但し、甲骨文中には「不之 V」の構造は見られない。

の解釋も、一定程度妥當な結論と言える。これは、「S 弗吉」や「S 弗佳……」という用例が見られないことから支持される。

問題は、「不」が動態性の強い動詞、或いは他動詞を否定する場合であり、また「不」と「弗」両方で否定しうる動詞が存在することである。このとき両者にどのような否定機能の違いがあるのか。以下、命辭における「不」と「弗」の機能的差異について檢證する。

いま、表1に挙げた朱岐祥 1992の「5 被動句式」に注目してみたい。謂わば、受動文には「不」が用いられ、「弗」が用いられないとの指摘である。Djamouri 2001: 166にも同様の見解が示されている。

- (21) 貞：“失¹⁴ 羌不其得。” (合集 508) 【典賓】¹⁵
 [檢證した、「逃げた羌は捕獲されていない (=逃げたまま) である」と]
- (22) 貞：“今十一月羌不其得。” (合集 8914) 【典賓】
 [檢證した、「この11月羌は捕獲されていない (=我々のもとにない) であろう」と]
- (23) 乙酉卜：“丯豕不其𠄎 (擒)。” (合集 10249) 【自賓問】
 [乙酉の日に卜った、「丯 (地名)¹⁶の豚は捕まえていない (=獲物がない / 成果がない) であろう」と]
- (24) 癸巳卜，賓貞：“臣不其𠄎。” (合集 643 正) 【典賓】
 [癸巳の日に、賓が檢證した、「臣は捕らえていない (=我々のもとにない) であろう¹⁷」と]

¹⁴「失 (𠄎)」の字釋は趙平安 2000/2009aによる。また、「失羌」は沈培 2002: 251により「逃亡した羌」と解釋する。

¹⁵各例文後の【 】は當該甲骨文の分類を示す。本稿の甲骨文の分類は黃天樹 2007 及び楊郁彥 2005に従う。

¹⁶島 1967: 418によると、「丯」は殷に屬する一地方である。

¹⁷「臣」の身分については議論があり、奴隸であると言う者もいれば、官員であると言う者もいる。但しいずれにしても、第一期甲骨文中「臣」は「羌」と同様、捕獲される對象となっていることから、その身分は低いものと見なされる。例えば、

壬午卜，敵貞：“𠄎追多臣、失羌，弗𠄎。” (合集 628 正) 【典賓】

[壬午の日に卜い、敵が檢證した、「𠄎 (人名)は多臣と逃亡した羌を追っても、捕獲できない」と]

従って、例 (24)の「臣不其𠄎」の「臣」は動作主 (捕らえる側) ではないと言える。ただし、

- (25) 貞：“亘不其卒。” (合集 643 正) 【典賓】
 [檢證した、「亘方 (敵勢力) は捕らえられていない (=我々のも
 にない) であろう」と¹⁸⁾]
- (26) 貞：“今夕師不彜 (振)。” (合集 36430) 【黃類】
 [檢證した、「今夜、軍は亂されていない (=被害がない)」と]
- (27) 壬午卜牙，立貞：“王今夕不彜 (振)。” (合集 36442) 【黃類】
 [壬午の日に牙地で卜い、立が檢證した、「王は今夜亂されていない
 (=被害がない)」と]
- (28) 貞：“下乙不尃 (賓) 于帝。” (合集 1402 正) 【典賓】
 [檢證した、「祖先神の下乙 (祖乙) は最高神帝に客として厚遇され
 ていない」と]
- (29) 父乙不尃 (賓) 于祖乙。 (合集 1657 正) 【典賓】
 [祖先神の父乙 (小乙) は (さらに上の世代の祖先神である) 祖乙に
 客として厚遇されていない]
- (30) 壬辰卜，夬：“噉今勿入，不涉。” (合集 20464) 【自肥筆】
 [壬辰の日に卜い、夬 (が檢證した)、「噉 (人名)¹⁹ は今入ってはいけ
 ない、(入ると) 川を渡れない (=川の反対側に居ない)」と]
- (31) 疾齒羸²⁰。
 不其羸。 (合集 709 正) 【賓一】
 [病んだ齒は良くなる。／良くなっていないだろう]

以上の受動文は、明示的なヴォイスマーカーなくして被動作主 (patient)

同じ「臣」でも「小臣」は奴隸ではなく、高い身分であるとも考えられる (寒峰 1983:43-50)。或いはもとは奴隸であったが、統治機構の複雑化につれてより多くの職能を得て身分が高くなったとの説もある (蕭良瓊 1991:362-365)

¹⁸「亘不其卒」の主語が動作主ではなく被動作主であると言えるのは、「亘」がしばしば、甲骨文中で殷側の勢力に追われ、捕まえているからである。例えば、

戊午卜，敵貞：“雀追亘，有獲。” (合集 6947 正) 【賓一】

[戊午の日に卜い、敵が檢證した、「雀 (殷の武將) は亘を追い、捕まえる」と]

従って、「亘」は捕らえられる被動者と見なすべきである。

¹⁹「噉」を人名とするのは、黃天樹 2007:18 による。

²⁰「羸」字は従来、「龍」に隸定され、「龍」に讀まれてきたが、ここでは王蘊智 2004 により「羸」に隸定する。その具体的な釋讀については、今だ明らかになっていないが、およそ「病が癒える」、「病を取り除く」の意味に相當する (王蘊智 2004:75)。

が主語に立つもので、従来、“受事主語句（被動作主主語文）”、“意念被動句（概念上の受動文）”、“反賓爲主”などと稱されてきた。無論、受動文として扱われる以上、對應する能動文も存在する。例えば、

- (32) 雀得亘我。 (合集 6965) 【自賓間】
 [雀(殷の將軍)は亘方(敵勢力)と我國(敵勢力)²¹を捕獲する]
- (33) 癸酉卜, 出貞: “皐皐(擒)²² 舌方。” (合集 24145) 【出一】
 [癸酉の日に卜い、出が檢證した、「皐(殷の將軍)は舌方を捕まえる」と]
- (34) 辛亥貞: “雀牽亘, 受又(祐)。” (合集 20384) 【歷一】
 [辛亥の日に檢證した、「雀が亘方を捕らえるとき、祐を受ける」と]
- (35) 其罍(振) 壹。 (屯南 236) 【無名】
 [壹(地名)を亂すであろう]
- (36) 王宥(賓)父丁, 歲(劇) 二牛。 (合集 23188) 【出二】
 [王は祖先神父丁を賓客として厚遇するための祭祀をするとき、二頭の牛を斬り殺す]
- (37) 戊辰卜貞: “翌己巳涉師²³。” (合集 5812) 【賓三】
 [戊辰の日に卜い檢證した、「次の己巳の日、(殷王は)軍隊に川を渡らせる」と]
- (38) 乙未卜, 敵貞: “妣庚羸王疾。” (合集 13707 正) 【賓一】
 [乙未の日に卜い、敵が檢證した、「祖先神妣庚は王の疾病を取り除く」と]

動作主を X、被動作主を Y で置き換えるならば、(21) (22)「Y+得」に對し (32)「X+得+Y」、(23)「Y+擒」に對し (33)「X+擒+Y」、(24) (25)「Y+牽」に對し (34)「X+牽+Y」、(26) (27)「Y+振」に對し (35)「(X+) 振+Y」、(28) (29)「Y+賓」に對し (36)「X+賓+Y」、(30)「Y+涉」に對し (37)「X

²¹ 本例の「我」が代名詞ではなく方國名であり、且つ殷に敵する勢力であるというのは、Takashima & Serruys 2010 vol. II : 127-128 による。

²² 陳夢家 1956/1988 : 554 及び葛亮 2013 : 36 により「皐」を「皐」の異體字と解釋する。

²³ 裘錫圭 1979/2010b : 25-26 は「涉師」の「涉」を“使動用法”、すなわち使役義を表していると見なしつつ、“使師涉水(軍隊に川を渡らせる)”と解釋する

+ 涉 + Y]、(31)「Y + 羸」に對し (38)「X + 羸 + Y」という對應關係を見て取れる。

この種の“受事主語句(被動作主主語文)”は時代を下った上古中期以降しばしば見られるが、その成立には上古中國語の動詞の性質—非對格動詞(unaccusative verb)か非能格動詞(unergative verb)か—が關與しているという議論が、近年盛んに展開されている(大西 2004、宋亞云 2014、梅廣 2015 など)²⁴。

このうち非對格動詞とは目的語の有無で主語の意味役割が變わるもので、目的語を取らないとき主語が被動作主(patient)或いは對象(theme)になり、目的語を取るとき主語が動作主(agent)又は使役者(causer)、目的語が被動作主又は被使役者(cause)になる動詞を指す。一方、非能格動詞は目的語を取るか否かに關わらず、主語の意味役割が變わらない動詞である。兩種の文型は以下のように圖式化できる。

(39) 非對格動詞：X + V + Y Y + V

非能格動詞：X + V + Y X + V

次の「斬」は非對格動詞であり、目的語を取らないとき、その主語は「斬られる方」で、「斬る方」ではない。一方、目的語を取るとき、主語は「斬る方」で、目的語は「斬られる方」である。例えば、

(40) 信方斬曰：“吾悔不用蒯通之計。”(『史記』淮陰公列傳)：Y + 斬 = Y が斬られる

[韓信がまさに斬られようとしているとき言った「私は蒯通の策を採用しなかったことを後悔している」と]

(41) 大王斬臣以徇國。：X + 斬 + Y = X が Y を斬る

(『左傳』莊公九年)

[大王は臣下を斬り、國に従わせる]

次の「追」は反對に非能格動詞であり、目的語の有無に拘わらず、主語は常に「追う方」を指す。例えば、

²⁴ 非對格動詞は「能格動詞」(日)、“作格動詞”(中)とも稱され、非能格動詞は「對格動詞」(日)、“中性動詞”(中)とも稱される。非對格動詞の定義や分類基準については、各學者によって異なるが、ここでは主に大西 2004、宋亞云 2014 によった。但し兩者の間にも出入りはある。

- (42) 楚令尹子玉追秦師, 弗及。: X + 追 + Y = X が Y を追う
(『左傳』 僖公二十五年)

[楚の令尹子玉は秦軍を追うも、追いつかなかった]

- (43) 燕軍樂毅獨追, 至于臨菑。: X + 追 = X が追う
(『史記』 樂毅列傳)

[燕軍の樂毅は單獨で追ひ、臨菑についた]

これまでの非對格動詞研究は主に上古中期以降を対象としており、管見の限りでは、甲骨文の非對格動詞の研究はまだ大きな展開を見ていない。しかし、上段で挙げた「得」、「𠄎 (擒)」、「𠄎」、「𠄎 (振)」、「宀/宀 (賓)」、「涉」、「羸」は、動詞と項 (argument) の関係から見れば、非對格動詞であると考えることができる。

とは言え、非對格動詞が目的語を取らないとき、その主語が常に被動作主或いは対象を指示するわけではない、という点には注意を要する。上古中期以降の非對格動詞は、對句文や非能格動詞との連動文を構成するといった一定の条件のもと、目的語を伴わない動作主主語文を構成することがある (大西 2004: 384-390) が、甲骨文でも、特定の条件のもと非對格動詞は目的語を伴わずに、動作主或いは使役者を主語とする文を構成できると見られる。例えば、

- (44) 王往田從來, 求豕, 𠄎 (擒)。 (合集 33362) 【歷無名】
[王が來地から狩獵に行くとき、豚を求めれば、捕まえることができる]

この文は統語上、文頭の「王」が「𠄎 (擒)」の主語であるが、「王」が捕らえられるという事態を表してはいない。「𠄎 (擒)」の前の「求豕」という VO 構造において獲物「豕」が提示されていることから、「𠄎 (擒)」の目的語は省略されていると考えられる。謂わば、「𠄎 (擒)」は「王𠄎 (擒) 豕」を意味するのである。また、

- (45) “其于甲迺射柳兕, 亡災, 𠄎 (擒)。”
“弗𠄎 (擒)。”

丙午卜，在冒貞：“王其田柳，卒²⁵逐亡災，𠄎（擒）。”

“不𠄎（擒）。”（英國 2566）【黃組】

〔もし甲の日になってから柳（地名）の水牛²⁶を弓矢で狩れば、災いがなく、捕らえることができる。／捕らえることができない。／丙午の日に卜い、冒（地名）で検証した、「王が柳地で狩獵をすれば、獲物を追い終るときまで、災いがなく、捕らえられる。／捕らえられていない（=成果がない）〕

前段で「射柳兕」という VO 構造において獲物「柳兕」が示されていることによって、2 行目以降の全ての「𠄎（擒）」の目的語が省略されている。いずれの「𠄎（擒）」も統語上、主語が「王」のみ現れ、目的語は見えないが、受動的意味にはならず、「王」が捕まえるという能動文的、使役の意味を表す。

さて注目すべきは、上の如き非對格動詞—「得」、「𠄎（擒）」、「卒」、「𠄎（振）」、「宀／宀（賓）」—が一旦「X+V+Y」型を構成すると、否定詞に「弗」を用いることができるようになることである（主語は時に省略される）。例えば、

(46) 弗其得羌。（合集 520）【賓三】

〔（我々は）羌を捕獲できないだろう〕

(47) 辛巳卜，敵貞：“雀弗其得亘我。”（合集 6959）【賓一】

〔辛巳の日に卜い、敵が検証した、「雀は亘方（敵勢力）と我國（敵勢力）を捕獲できないだろう」と〕

(48) 貞：“弗其𠄎（擒）毘（麋）。”（合集 10344 正）【賓一】

〔検証した、「（我々は）麋（鹿の一種）を捕まえることができないだろう」と〕

(49) 乙亥卜：“弗卒𠄎（敖）²⁷。”（合集 33010）【自歴間】

〔乙亥の日に卜った、「（我々は）𠄎（敖）族を捕まえることができない」と〕

²⁵「卒」字の字釋は、裘錫圭 1990/2012：373 による。

²⁶「兕」を「水牛」と解するのは、雷煥章 2007 による。

²⁷「𠄎」字（原文「𠄎」）の字釋については、劉釗 2005：10-13 による。

- (50) 貞：“兔²⁸、三十馬弗其牽羌。” (合集 500 正) 【典賓】

〔検証した、「兔（人名）と 30 人の馬を管理する役人は羌を捕らえる
ことができないだろう」と〕

- (51) 方來入邑，今夕弗壘（振）王師。 (合集 36443) 【黃類】

〔方國が邑に侵入するも、今夜、王の軍を亂さないだろう／亂すこと
はできないだろう〕

- (52) 弗其妨（賓）婦好。 (合集 2638) 【典賓】

〔（某神）は婦好（祖先神）を賓客として厚遇しないだろう／厚遇す
ることはできないだろう〕

以上を要するに、非對格動詞が目的語をとらない「Y+V」型のとき否定詞は専ら「不」を用いるも、目的語をとる「X+V+Y」型になると否定詞は「弗」を用いることができるようになる、ということである。

ところで、上古中期以降の「Y+V」型非對格動詞の意味機能については、宋亞云 2014 は、

- (53) 作格動詞的致使義對結構具有依賴性，必須在帶賓語時纔能體現出來。一旦它們不帶賓語、用於 SV 句式時，主語就不再是施事或致使者，而是受事或當事，作格動詞只是體現出一種結果狀態義。

(宋亞云 2014 : 138)

〔能格動詞（非對格動詞）の使役的意味は構造に對し依存性を備えており、それは目的語を取らなければ表現されない。ひとたび能格動詞（非對格動詞）が目的語を取らず、SV 型（本稿が言うところの「Y+V」型：引用者注）で用いられると、主語はもう動作主や使役者ではなく、非動作主或いは對象で、非對格動詞は單に結果状態を表すだけとなる〕

と述べ、「Y+V」型が結果状態のみ表していると分析する。このほか巫雪如 2008 も「Y+V」型は被動作主の結果状態が意味的焦點となっており、動作

²⁸「兔」は従来「兔」と隸定されてきたが、本稿では單育辰 2015:73-79 によって「兔」に作る。なお、ここでは人名と考えられる。

主の存在は關心の焦點ではないと主張する²⁹。

甲骨文に立ち戻れば、上段で挙げた非對格動詞—「得」、「𠄎（擒）」、「牽」、「𠄎（振）」、「涉」—も、その動作が完了した後、結果が明確な形で残るものであり、結果状態表現と親和性が高いと考えられる。

さてここで、再び否定詞「不」に戻ろう。これまで見たように「不」は、①単純な状態を否定できる。例えば、「不吉」、「不佳」、「不嘉」など。これはすでに Serruys 氏や Takashima 氏の一連の研究、或いは雷煥章 1999、Honkasalo 2013 によって既に指摘されている。

同時に「不」は、②非對格動詞の「Y+V」型に用いられる。この文型は動作の結果状態を前景化するものである。

「不」に關するこの2點の機能から想起されるのは、「不」が「結果状態」に強く關與する否定詞ではないか、ということである。

「結果状態」とは何か、について、寺村 1984 は、

- (54) いわゆる結果の状態（つまり事象の完了の結果の存在）の場合は、眼前の状態を、ある過去の事件の結果の痕跡であると解釋する思考が介在している。（寺村 1984：136）

と指摘する。「眼前の状態」が「過去の事件の結果の痕跡であると解釋する」のは、發話時（speech time）・參照時（reference time）より前に行われた動作行為の結果が發話時・參照時でなお、視覚可能な形で「殘存・繼續」している、と言い換えることができる。この「結果繼續」に對して工藤 1995 は、

- (55) <結果繼續>とは、結果が残っていることは、既に運動は先行して起こっているということなのであるから、廣い意味でのパーフェクトであろう。（工藤 1995：117）

として、これをパーフェクト（perfect）³⁰ というアスペクト的意味のヴァリア

²⁹ “在同時關注受事的動詞中，其語義焦點大多為受事者在動作發生後所呈現的結果狀態，施事者的存在與否並不是關注的焦點，先秦文獻中大量存在的無施事者出現的受事主語句就是最好的證明。”（巫雪如 2008：185）

³⁰ パーフェクトは一般的に以下のように定義づけられる。

An anterior (perfect) signals that the situation occurs prior to reference time and is relevant to the situation at reference time. (Bybee *et al.* 1991：54)
 [パーフェクトはある狀況が參照時以前に起こり、且つそれが參照時の狀況と關連を持って

ントの1つとして位置づける。さらに工藤 1995 は日本語の「シテイル」を取り上げつつ、

- (56) 結果継続＝状態パーフェクトは、「運動の完成後の段階＝結果状態の継続性」に重点がある。……結果状態＝状態パーフェクトが含んでいる先行の運動性を切り捨ててしまったときには、形容詞的に、＜もともとの状態＝一次的性質＞の意味になる。結果継続性が、先行の運動を前提とする＜二次的状态＞であるとすれば、単なる状態とは先行する運動を前提としない＜一次的状态（性質）＞である。

（工藤 1995：124－125）

として、結果継続は「運動の完成後の段階＝結果状態の継続性」であり、同時にそれは容易に「一次的状态」、すなわち「性質・属性」にも轉化しうることに言及する。

ここで、甲骨文に立ち返れば、「不」は、（命辭に關與するところの）参照時以前に動詞の語彙的意味が示す結果を得られなかったことにより、その行爲による結果状態が参照時において存在しないこと、翻って言えば、「不V」という結果状態が殘存していることを表すものと考えられる。謂わば、廣義のパーフェクトないし結果状態を表す否定詞である。また、結果の「状態」や「殘存・継続」に焦點がある以上、「不」で否定される動詞は、結果に先行する動作プロセスの局面が背景化しているとも見なせる。さらに、工藤 1995 に指摘を見るように、「結果状態」は先行の運動性が完全に捨象された場合、「單純状態」となるが、甲骨文では「單純状態」～「結果状態」という連続性のあるアスペクト的意味に對し、同一の否定詞を用いている、とすることができるのである。

實のところ、結果状態と單純状態という異なったアスペクト的意味を同じ言語形式で表すという事例は、言語類型論的にもしばしば見られる。例えば、上で挙げた日本語の「シテイル」がこれに該當する³¹。また、結果状態は發話

いることを示す]

³¹ 例えば、「釘が曲がっている」という場合、話者が「釘が曲がった」という出来事があったと解釋していれば、「結果状態」になるだろうし、はじめから釘が曲がっていると考えるならば、「單純状態」と解釋しうる（金杉等 2013：29）。

時・参照時より前の行爲の結果が発話時・参照時に残存しているという点から見れば、結果相 (resultative) とも見なせるが、Bybee *et al.* 1991: 63–68 は結果相表現の來源として、しばしば状態表現が用いられているという観察結果を提示している³²。

付言すれば、Comrie 1976: 84 は多くの言語でパーフェクトが受動のヴォイスによって示されている事例を挙げ、また Bybee *et al.* 1991: 54 は結果相と受動文の類似性を指摘するが、非對格動詞の「Y+V」型は、被動作主が主語の位置に立ち現れているという点においては、廣義の受動文であり、そこに「不」が用いられているということは、「不」が正に (状態) パーフェクト・結果相を表す否定詞として機能していることの證左となる。

なお、甲骨文の命辭は占卜文であるから、時制としてはそのほとんどが未來である。命辭には未來の「いつ」の時點で實現するかが明記されないことも多いが、殷人が占いを行うときは、命辭で述べる事態について、必ず「いつか」という心づもりがあったはずで、「いつでも良い」ということはあり得ない。言い換えれば、占いには、その實現が想定される特定の未來時があったはずで、「不」が表す状態パーフェクト・結果状態は、命辭として提示される未來時を参照時として、それ以前に動詞が表す結果が得られなかったことを示していると思われる。

次のような典型的自動詞は、非對格的振る舞いを見なせないものであるが、常に「不」で否定される。

(57) 翌壬寅不雨。 (合集 685 正) 【賓一】

[次の壬寅の日に雨が降っていない]

(58) 癸未卜， 敵貞：“今日不風。” (合集 13344) 【賓一】

[癸未の日に卜い、が檢證した、「今日これから風が吹いていない」と]

天候を占う場合、主眼は概ねその天候が一定期間、残存・繼續するか否かにあるものと推測される。このことが、否定詞として「不」を用いる動機と

³²「不」の單純状態性否定と結果状態性否定のどちらがより根源的用法かについては、ここでは立ち入られない。

なっているのであろう。

次に「弗」に対する検証に移りたい。「弗」はしばしば非對格動詞の「X+V+Y」型で用いられるということを上段で述べた。上古中期以降における非對格動詞に関して大西 2009 は、

- (59) 古漢語的作格動詞和使役句關係非常密切，它是上古漢語的詞彙使役的骨幹部分。 (大西 2009：385)

〔古代中國語の能格動詞（非對格動詞）は使役文と非常に密接な關係があり、それは上古中國語の語彙使役の中核部分である〕

と述べる。また語彙使役 (lexical causative) は言語類型論的には、直接使役を表す傾向があることが知られているが (Comrie 1989：171-173)、大西 2009：386-390 の分析によれば、上古中國語の語彙使役 (= 非能格動詞) も被使役者の有生無生に拘わらず、使役者が被使役者を直接コントロールするもので、使役イベントにおける結果事象 (caused event) は使役者によって直接引き起こされるものである。

大西氏は同時に上古の語彙使役文は、被使役者の自主性が低いと見るが、これは、上段で挙げた甲骨文の非對格動詞—「得」、「𠄎 (擒)」、「牽」、「𠄎 (振)」、「𠄎 / 𠄎 (賓)」、「涉」、「羸」—の用例を見ても概ね同様で、例えば「X+得+Y」、「X+擒+Y」、「X+牽+Y」はいずれも被使役者 Y に対する捕獲行爲を表しており、Y に自主性はなく、「X+振+Y」も、Y に対する急襲を表していると考えられ、やはり Y に自主性はない。「X+賓+Y」の使役者 X は上位ランクの祖先神で、被使役者 Y は下位ランクの祖先神であることから見て、Y の自主性は低いと見て良い。「X+羸+Y」の X は祖先神で、Y は生きている殷人であり、ここでも Y の自主性は低いと見られる。「X+涉+Y」は (37)「翌己巳涉師」に見るように (主語として想定できる) 殷王から麾下の「師」への直接操作であり、Y の自主性はなお低い。以上を鑑みれば、甲骨文の非對格動詞の「X+V+Y」型もおおよそ語彙使役文に相当すると考えて相違ない。

ところで、語彙使役が動作行爲の局面、すなわち manner (様態) を表すか否かについては、議論がある。雅洪托夫 1969/1986:107 は直接操作 (direct manipulation) という行爲を表すと考えるも、一方、王力 1958/1980:401 は

行爲を表さず、結果に至ったことだけを示すものと分析する。この問題に對し大西 2009 は、

- (60) 詞彙使役句的語義焦點是致因性，主語是否進行某種行爲只不過一種暗示。 (大西 2009 : 392)

〔語彙使役文の語義焦點は因果性で、主語がある種の行爲を行ったかどうか暗示されているにすぎない〕

と述べ³³、また、宋亞云 2014 も、

- (61) 作格動詞帶賓語時，具有致使義，語義結構是：(動作) + [結果]，“動作”義是隱含的，“結果”義是外顯的。 (宋亞云 2014 : 132)

〔能格動詞(非對格動詞)が目的語を取るとき、致使(使役)の意味を持つ、その意味構造は「(動作) + [結果]」であり、「動作」義は背景化し、「結果」義が前景化する〕

と述べる。兩氏とも、主語が行う動作が背景化しているという點で共通している。しかし、語彙使役文で動作行爲が常に背景化しているとは必ずしも言えない。實のところ、大西 2009:392-395 も指摘するように、甲骨文の語彙使役文の主語は常に人や先公、「帝」といった有生名詞でその表現機能はそもそも直接操作であったが、それが後に使役に擴張した可能性がある。さらに、劉承慧 1998 も、以下のように、語彙使役が有生主語と共起したとき、動作行爲の意味が強くなることを指摘する。

- (62) 使動詞搭配原因主語時，語義焦點在「致使」。再者，使動詞搭配屬人主語時經常帶有「活動」暗示，主語隱含的「意志力」越強，「活動」の意味越濃厚。 (劉承慧 1998 : 88)

〔使動詞(本稿の言うところの語彙使役:引用者注)が原因主語と共起したとき、語義焦點は「致使(使役)」にある。さらに、使動詞が屬人主語と共起したとき、常に「活動」を暗示し、主語の隠れた「意

³³大西 2009 がこのように考えるのは、以下のように主語が動作主ではなく有責者で、動詞の有する動作行爲的局面が完全に背景化している例があることによる。例えば、以下の例で主語「矢人」や「函人」は動詞「傷」の直接の動作主ではない。

矢人唯恐不傷人，函人唯恐傷人。 (『孟子』公孫丑上篇)

〔矢職人は(自らが作った矢の質が良くないことによって)人を傷つけないことだけを恐れ、箱職人は(自らが作った鎧の質が良くないことによって)人を傷つけることだけを恐れる〕

志力」が強ければ強いほど、「活動」の意味は濃くなる]

いま、上で挙げた甲骨文の「X+V+Y」型（語彙使役文）に立ち戻れば、主語の位置に現れるのは、「雀」（殷人）、「皐」（殷人）、「王」、「方」（敵勢力）、「妣庚」（祖先神）、「兔」（殷人）、三十馬（殷の役人）といった（廣義の）有生名詞である。中には主語のない例もあるが、いずれも殷王や殷人、神靈が主語であったと推測でき、(32)～(38)及び(46)～(52)はいずれも目的語に対する主語からの直接操作を表していたと解釈できる。この場合、非對格動詞の動作過程は背景化しているとは言えない。

直接操作は使役構文のプロトタイプと考えられており（中右・西村 1998：124-125）、甲骨文の語彙使役の多くが直接操作であることに鑑みれば、それは上古中期以降ほどの文法化を経ていない、より原始的な使役とも考えられる。但し、大西 2009：395 も指摘するように、甲骨文が反映する言語は極めて限定的であり、無生物を主語とする使役文がないとは断言し得ない。言い換えれば、直接操作以外の因果関係を表す使役文の存在を完全には排除できない。

さて、再び甲骨文の否定詞の問題に立ち返れば、非對格動詞か否かに関わらず、以下の他動詞もしばしば「弗」で否定される。ほとんどが、目的語を取れる他動詞である。

(63) 壬午卜，敵貞：“亘弗戔（翦）³⁴ 鼓。” （合集 6945）【典賓】

[壬午卜の日に卜い、敵が検証した、「亘は鼓を討ち滅ぼすことはできない」と]

(64) 貞：“帝弗終茲邑。” （合集 14210 正）【賓一】

[検証した、「帝はこの邑を終わらせることはない／終わらせることはできない」と]

(65) 王弗及方。 （合集 28013）【無名】

[王は方國を捕らえることはできない]

例(63)は相手國を攻撃し滅ぼすか否かを表しているが、これは目的語に対する直接操作である。(64)も帝が殷の都市を終わらせるか否かという直接操

³⁴「戔（翦）」字の字釋は陳劍 2007 による。

作を表す。(65)の「及」は Takashima & Serruys, 2010 vol. II : 592 は“get”の意味に解するが、そうであるならば、やはり直接操作と言える。この他、

(66) 己亥卜，王：“余弗其子婦姪子。” (合集 21065) 【白賓問】

〔己亥の日に王(が卜った)、「私は婦姪の生んだ子を王子とすることができないだろう」と〕

例(66)は、裘錫圭 1979/2012b : 25-26 が「子」の意動用法の例として擧げるものであるが³⁵、ここの「子婦姪子」は或いは「婦姪の生んだ子を王子とすることができない」という使動用法、すなわち語彙使役文と見なすこともできる。「子」が語彙使役となる用法は、後の時代にも見られる。例えば、

(67) 子異人，秦之寵子也。無母於中，王后欲取而子之。

(『戦国策』秦五・濮陽人呂不韋賈於邯鄲)

〔異人であるあなたは、秦から特に可愛がられている子です。母が宮中におらず、王后が引き取り子にしようと望んでいます〕

従って、(66)も目的語に對する何らかの操作を伴った“致使(使役)”を表していると思なせる。

以上見た来たように、非對格動詞は語彙使役と密接な関係がある。さらに非對格動詞とは言えない例(63)～(66)も、意味としては“致死(使役)”と関係が深い。

一般的に言って、使役状況の中には2つ或いは2つ以上のイベントが含まれる。それは原因事象(causing event)と結果事象(caused event)であり³⁶、両者が直接的な因果関係を構成して使役を表す。例えば、例(41)の「大王斬臣」は動詞が1つであるため、表面上は2つのイベントを含んでいないように見えるが、実際には「大王が斬る」という原因事象と「臣が斬られる」という結果事象が含まれる。謂わば、「X+V+Y」はXがVという行爲を遂行し(原因事象)、その結果としてYに變化が生じる(結果事象)、というスキーマ的意味を有していると言える。

従って、「弗」が“致使(使役)”を否定しているということは、言い換え

³⁵ 裘錫圭 1979/2012b : 26 は“不以婦姪所生之子爲子(婦姪の生んだ子を子と見なさない)”と譯す。

³⁶ 郭銳 2003 : 155-156 による。

れば、「弗」が、目的語に何かの動作を加え、それによって目的語が變化を被るという事態を否定しているということに等しい。「弗」に関して、雷煥章 1999 は目的語に變化を生じさせる作用力が強い他動詞の前で用いると指摘し（第1節の(19)を参照）、Honkasalo 2013 は他動性が高く、目的語への影響力強い動詞を否定すると分析するが（第1節参照）、正に妥当性の高い考察と言えよう。

もし、以上の論述に大過なければ、「弗」について次のような解釋を導くことができる。すなわち、甲骨文の「弗」はVの表す動作によって対象に何らかの變化や結果をもたらすということを否定する“致使(使役)”の否定詞である。Vの何らかの行爲に伴う結果の發生を否定する。従来、「弗」は他動詞のみを否定するとの考えがしばしば提示されてきたが、これは正に「弗」が対象へ働きかける動作行爲を否定するものであることに起因するのであり、言い換えれば、「不」が結果状態を前景化し、動作プロセスの面を背景化しているのに對し、「弗」は動作プロセスの局面を背景化していないのである。

以下、「不」と「弗」の否定対象の違いを、具體的用例を通して檢證する。

(21)「失羌不其得」と(22)「羌不其得」は、「羌/失羌」が参照時(未來のある時點)以前に「捕獲されなかった」という結果が、参照時にもなお殘存している點に焦點があり、「得」(捕獲する)の動作プロセスとしての局面は背景化されている。より單純化して言えば、「羌の捕虜が我々のもとにない」ということである。一方(46)「弗其得羌」は無主語文であるが、殷側の人物が主語として想定でき、その人物の行爲により「羌」が捕獲されるという結果が發生しないことを表している。(47)「雀弗其得亘我」は「雀」の行爲により「亘我」が捕獲されるという結果が發生しないことを表している。

(23)「𠄎豕不其𠄎(擒)」は「𠄎豕」が参照時以前に「捕らえられなかった」という結果が、参照時にもなお殘存している點に焦點がある。つまり、「豚の獲物がない」。一方(48)「弗其𠄎(擒)麋」は殷人の行爲により「麋」が捕獲されるという結果が發生しないことを表している。

捕獲義を表す(24)「臣不其𠄎」、(25)「亘不其𠄎」と(49)「弗𠄎𠄎(敖)」、(50)「兔、三十馬弗其𠄎羌」も、同様の関係が想定できる。なお従来、「𠄎(𠄎)」字と「執(執)」字はともに「執」と讀まれ、異體字關係にあると考えられて

きた。しかし葛亮 2013:92-97 はこの 2 字に機能差があるとの説を提起しており、それは、「𠄎」は占ト主體（殷王や貞人）がコントロールできない状況、すなわち狩獵・征伐の結果を表す動詞で、一方「執」は占ト主體がコントロールできる状況、すなわち狩獵・征伐の行爲を表す動詞である、というものである。根據としては、「𠄎」が否定詞「不」「弗」（占ト主體のコントロールできない動作を否定）と共起し、「執」が「勿」「弼」（占ト主體のコントロールできる動作を否定）と共起する；「執」のみ指示使役動詞「令」「乎」と共起でき、「𠄎」はできない；「𠄎」は狩獵結果を表す節のみに現れ、「執」は狩獵行爲を表す節のみに現れる³⁷、というものである。葛亮 2013 は妥当性が高い議論と言えるが、さらに本稿の議論に引き寄せて言えば、「𠄎（𠄎）」字と「執（執）」字の上記の意味機能差をもたらすのは、その動詞的性質の違い、すなわち前者が非對格動詞であり、後者が非能格動詞であることに由来すると推測される。事實、「𠄎（𠄎）」は、“致使（使役）”或いは結果を表し、同時に“受事主語句”「Y+V」型をも構成し得るが、「執」は多くの場合、行爲の局面のみ表し、結果を含まない。謂わば、「𠄎（𠄎）」と「執（執）」は意味の接近した別の語であった可能性が高い。

なお付言すれば、ある動詞が非對格か否かは、終始不變ではなく、方言ないしは時代によって變異しうると考えられる。例えば、「執」は上で述べたように、甲骨文は非能格性を帯びているが、一方で上古後期では、大西 2004:383 が指摘するように、非對格性を帯びている。また、「逐（逐）」は、甲骨文では動物を追うという意味に使われる動詞で、概ね目的語に動物名詞を取り、主語に動物名詞を取ることがない。すわなち、「X 逐 Y/X 逐」という文型を構成する非能格動詞と見られる。しかし、上古後期では、大西 2004:383-384 が述べるように、非對格性を帯びている。「得」に関しては、甲骨文、上古後期いずれも非對格動詞と見なされる。

³⁷ 葛亮 2013:66-67 によると、狩獵動詞は「狩獵行爲動詞（+地名 or 獲物名），狩獵結果動詞（+獲物名）」という順番の複文を構成する。例えば、

王其田柳，𠄎（擒）。

（英國 2566）【黃類】

〔王が柳地で狩獵を行えば、獲物を捕らえられる〕

では、「田」が行爲を、「𠄎（擒）」が結果を表す。「𠄎」と「執」で言えば、「𠄎」は後節のみに現れ、「執」は前節のみに現れるということである。

(26)「今夕師不罍(振)」と(27)「王今夕不罍(振)」は「罍(振)」の具体的な語義は不明なものの、軍が何らかの急襲を受けるも亂されることなく、結果として視覚可能な被害が存在していない點に否定の焦點があるものと考えられる。一方、(51)「方來入邑，今夕弗罍(振)王師」は、「方」の行爲により「王師」が亂されるという結果が発生しないことを表している。前者は、動作プロセスの局面が背景化されているが、後者は背景化されていない。

(28)「下乙不宥(賓)于帝」、(29)「父乙不宥(賓)于祖乙」は高島 2002 によればそれぞれ「(既に逝去した先祖の)下乙が帝のところで賓客として厚遇されていない」、「(既に逝去した先祖の)小乙が祖乙のところで賓客として厚遇されていない」という意味に解釋される³⁸。參照時以前に、下位ランクの祖先神が上位ランクの祖先神に「厚遇されなかった」という結果が、參照時でなお残存していることを示している。一方(52)「弗其媯(賓)婦好」は、ある神靈の行爲により「婦好」が賓客として遇されるという結果が発生しないことを表している。

(30)「噉今勿入，不涉」は、對應する「弗」文はないが、その否定焦點は「噉」が川を越えないという結果が參照時に存在している、より單純化して言えば、「噉」が川の反対側にいないという點にある。このとき動作プロセスの局面は相當に背景化され、「噉」が移動できているかどうかは焦點化されている。

(31)「(疾齒)不其羸」も、對應する「弗」文はないが、それ自身の否定焦點は「疾齒」が治らず悪いままであるという結果が存在するところにある。

このほか、次の「來」も非對格動詞と認められる。(68)は「Y+V」型、(69)と(70)は「X+V+Y」型で、前者は「不」を後者は「弗」を用いる。

(68) 己未卜敵貞：“缶不其來見王。” (合集 1027 正)【賓一】

³⁸ 高島 2002:79-80 は「A+不宥+于+B」を“(已經去世的)A不在B那裡待爲賓客(既に逝去したAがBのところで賓客として遇される)”の意味に解釋する。高嶋氏は「賓」を字形によって2種に分類する。1種は「宥」で、狀態的意味を表す動詞であり、もう1種は「媯」「宥」といったヴァリエーションで、非狀態的意味を表す動詞である。「不」が前者と共起し、「弗」が後者と共起することから見れば、字形の違いは狀態・非狀態という對立というよりも、むしろ「𠄎(牽)」字「執(執)」の機能差に平行するような、結果と動作の對立を表しているのかもしれない。

〔己未の日に卜い、敵が檢證した、「缶（人名）は来て王にまみえることはできないだろう」と〕

(69) 貞：“斐來牛。” (合集 9525 正) 【典賓】

〔檢證した、「斐（人名）は牛をもたらず」と〕

(70) 貞：“斐弗其來牛。” (合集 9525 正) 【典賓】

〔檢證した、「斐は牛をもたらずことはできないだろう」と〕

例 (68) の否定焦點は、參照時までに「缶」が「王」のところに來ていない、すなわち「王」のもとに居ない（から王にまみえることができない）という點にある。一方 (70) は、「斐」の行爲により「牛」がもたらされるといふ結果が發生しないことを表している。前者では、「來」という動作プロセスは背景化し、「王」のところに居ないという結果状態が前景化されているが、後者では「來牛」に關わる動作プロセスの局面が述べ立てられていると考えられる。

なお、非對格動詞「來」の「X+V+Y」型は「弗」で否定されることが多いが、時に「不」でも否定される。例えば、

(71) (= (11)) 甲辰卜，敵貞：“奚不其來白馬。”

(丙編 157 = 合集 9177) 【典賓】

〔甲辰の日に卜い、敵が檢證した、「奚は白馬をもたらししていないだろう (=白馬はこちら側にない)」と〕

「不」によって、參照時において「白馬」がこちら側にないという結果状態に焦點が当てられ、「奚」が「白馬」を寄こすという行爲を行うか否かという動作プロセスの局面は背景化されていると考えられる。

2. 「不」、「弗」と非能格動詞

ある非能格動詞は、「不」と「弗」兩方で否定され得る。例えば、

(72) 父乙不希／求 (咎)³⁹。 (龜甲 1.8.16 = 合集 2275) 【賓三】

³⁹「希」字は Takashima 1988 の字釋であるが、ここでは裘錫圭 1986/2012:284 により「求 (咎)」との字釋を併記した。

〔祖先神父乙（小乙）は災いをなしていない〕

(73) 黄尹弗彘／求（咎）王。 (丙編 104 = 合集 3458) 【典賓】

〔黄尹（神靈）は王に災いを下さない／下すことはできない〕

「彘／求（咎）」は神靈が災禍を下すことを意味する動詞であり、且つ目的語の有無で、主語の意味役割が変わらない非能格動詞である。無論、肯定文でも語順は変わらない。

(74) 父辛彘／求（咎）。 (續編 1.34.1 = 合集 2134 正) 【典賓】

〔父辛（祖先神）は災いをなす〕

(75) 黄尹彘／求（咎）王。 (丙編 104 = 合集 3458) 【典賓】

〔黄尹は王に災いを下す〕

以上はいずれも Takashima 1988 : 115 – 116 が挙げた例であるが、これらの例を根據に Takashima 氏は以下のような結論を導く。

(76) What, then, is the difference between bu (不) in (1) (本稿の (72) : 引用者注) and fu (弗) in (4) (本稿の (73) : 引用者注)? My answer to this question is that bu is a stative negative, while fu is a non-stative one. …… I now think, however, that the factor determining the use of the negative bu for the Shang people was that they conceptualized the verbs which bu negated to have been stative, both semantically and grammatically. In the case of (1) (= (72)) and (2) (本稿の (74) : 引用者注), the verb sha (彘), meaning “to be pernicious, to be imprecating,” is stative, in that the subject, Fatehr Yi 父乙, is described as being in the state of being pernicious to, or imprecating a curse upon, the living Shang. The emphasis here is who is in the state, not the object. …… For our purposes here it is important that we think of the stative verb sha in examples (1) (= (72)) and (2) (= (74)) as specifying its subject Fu Yi 父乙 and Fu Xin 父辛, respectively. They are identified in a ritual situation of having some noxious influence on the Shang. In contrast to (1) (= (72)) and (2) (= (74)), we see the use of the direct object, wang 王 “king,” in examples (3) (本稿の (75) : 引用

者注) and (4) (= (73)). This immediately changes the category of the verb sha from the stative one in (1) (= (72)) and (2) (= (74)) to the non-stative one. (Takashima 1988: 117–118)

〔例 (72) の「不」と例 (73) の「弗」の違いは何か。この疑問に對する私の解答は、「不」は状態否定、一方「弗」は非状態否定である、ということである。……しかし今思うに、殷人にとって否定詞「不」の使用を決める要因は、「不」が否定する動詞が意味的にも文法的にも状態であったと彼らが概念化したというところにある。例 (72) と (74) の場合、動詞「𠄎」は、「有害である、呪いをかけている」を意味し、状态的であり、その中で主語「父乙」は生者側の殷人にとって有害な状態にある、或いは殷人に呪いをかけているものとして描かれている。ここで強調されているのは、誰がその状態にあるかであり、それは目的語ではないということである。……我々の目的にとって、重要なのは、例 (72) と (74) の状態動詞「𠄎」はそれぞれその主語「父乙」と「父辛」を説明しているものと考えることである。彼らは祭禮の中で有害な影響を殷にもたらすものとして見なされる。例 (72) (74) と對照的に、例 (75) と (73) に直接目的語「王」が用いられているのが見える。これは動詞「𠄎」のカテゴリーを (72) (74) における状態動詞から非状態動詞へ直接變換している〕

謂わば、例 (72) (74) の「𠄎/求 (咎)」は状態動詞で、それを否定する「不」も状態性の否定であり、例 (72) は「父乙は殷に對し有害な状態にない」という意味で、文の焦點は主語にあり目的語にはない、一方 (73) (75) は直接目的語「王」が現れることで、「𠄎/求 (咎)」が状態動詞から非状態動詞へと變化しているという論旨である。

その後、Takashima 1988 を漢譯し増補した高島 2013 は、「弗」について、
(77) 它似乎的確有“實現”或“非事態”性的意思。 (高島 2013 : 152)

〔「弗」は間違いなく「實現」或いは「非事態」の意味があるようだ〕と述べる。

一方、本稿の解釋は、第 2 節で展開したように、高嶋氏とやや出入りがあ

る。すなわち、(72)「不𠄎／求 (咎)」は「父乙」により災いが下されなかったという結果が残存している、というところに焦点が有り、(73)「弗𠄎／求 (咎)」は、「黄尹」の行爲により「王」のもとに災いが下されるという結果が発生しないことを表しているものと見られる、という理解である。

次の動詞「𠄎 (害)」も、目的語をとるか否かで主語の意味役割が変わらず、非能格動詞と考えられ、従って否定詞については「𠄎／求 (咎)」と同様の解釈が可能である。さらに、(78)「不𠄎 (害) 王」は「不」がVOを否定しており、「不」が一項動詞や自動詞を否定するという従来の研究では、例外扱いされていたものである。

(78) 羌甲不𠄎 (害)⁴⁰ 王。 (合集 1805) 【賓一】

[祖先神羌甲は王に害をなしていない]

(79) 父乙不𠄎 (害)。 (合集 2247) 【典賓】

[父乙は害をなしていない]

(80) 父乙弗𠄎 (害) 王。 (合集 371 正) 【賓三】

[父乙は王を害さない／害すことはできない]

これらの場合もこれまで議論した「不」と「弗」の否定焦点の違いによれば、「不害」は「祖先神が王に害を下さなかった」ことの結果や影響が残存している點に焦点がある。一方「弗害」は、祖先神の行爲により「王」が害されるという結果が発生しないことを表している。

「隻 (獲)」も非能格動詞⁴¹と考えられるが、「不」と「弗」雙方と共起しう

⁴⁰「𠄎 (害)」の字釋については諸説あるが、ここでは裘錫圭 1983/2012 による。

⁴¹ 朱岐祥 1992: 112 は以下の「隻 (獲)」を“受事主語句”の例として挙げるが、そうであるならば、「隻 (獲)」は非對格動詞とも言えそうである。

例えば、

多羌隻 (獲)。多羌不其隻 (獲)。

(合集 154) 【典賓】

しかし、一般的に「隻 (獲)」は動作主主語をとる。例えば、

子商隻 (獲)。

(合集 371 正) 【賓三】

[子商が (獲物を) 捕える]

王不其隻 (獲)。

(合集 10839) 【自賓間】

[王は (獲物を) 捕えていないだろう]

加えて、第1期賓組卜辭には「多羌不隻 (獲) 鹿」(合集 153) といった卜辭が見えるが、このような用例を前提とすれば、上の「多羌獲」、「多羌不其獲」は「多羌」が動作主主語で、目的語が省略された文と見なされる。

る。例えば、

(81) (= (10)) 貞：“足不其隻（獲）羌。”

(丙編 120 = 合集 190) 【賓一】

〔檢證した、「足（人名）は羌を捕らえていないだろう〕と〕

(82) 雀弗其隻（獲）缶。

(合集 6834 正) 【賓一】

〔雀は缶を捕らえることができないだろう〕

高嶋 1992:46 は例 (81) で「不」が用いられるのは、殷人が「獲」という動詞を状態ではなくイベントとして認識したためであると考えるが（第1節の (16) を参照）、本稿の理解では、(81) の「不隻（獲）」の否定焦点は「足」が「羌」を捕らえていない、言い換えれば、捕虜の羌が逃げ切ったため、我々のもとにないという結果が残存している点にあり、一方 (82) 「弗隻（獲）」は「雀」の行爲により「缶」が捕らわれるという結果が発生しないことを表しているものと考えられる。

このほか、「令」字も「不」と「弗」によって否定される。例えば、

(83) 來乙未帝不令雨。

(合集 14147 正) 【賓一】

〔次の乙未の日に、帝は雨を降らせていない〕

(84) 丙辰卜， 貞：“帝弗令佳嬭。”

(合集 14161) 【典賓】

〔丙辰の日に卜い、貞が檢證した、「帝が命令しないのは嬭（人名または族名）である／帝は嬭にこそ命令しない〕と〕

例 (83) の「不令」は、参照時（乙未）以前に「帝が雨を降らせる指示ができなかった」ことの結果として「雨が降らない」という状態が残存しているところに否定焦点があり、一方 (84) 「弗令」は、「帝」が「嬭」に命令を出して、何らかの行爲をさせないというところに焦点があると推論できる。

なお、動詞が表す概念的な意味をいくつかの抽象的な述語概念で表示した構造を語彙概念構造 (lexical conceptual structure) と呼ぶが、動詞の表す事態の種類——状態や變化、活動など——によって、語彙概念構造は自ずと異なる。そのうち使役状況の語彙概念構造は以下のように描かれる。

(85) [[X ACT] CAUSE [BECOME [Y<STATE>]]]

(Rappaport & Levin 1998 : 104)

これは、X が活動し (ACT)、Y がある状態 (STATE) に變化する (BE-

COME) ようにさせる (CAUSE)、という抽象的な意味構造を表す。

この構造を否定詞の機能差異に援用すれば、動詞が「不」で否定されると、(85) の動詞のいくつかの意味成分のうち、結果状態の局面 [＜STATE＞] が活性化され、一方「弗」で否定されると、動作結果の發生の局面 [CAUSE [BECOME]] が活性化されるとも分析できる。上古中國語の非對格動詞は、その動詞ひとつで、複数の意味成分を含み、動作行爲のみならず、結果をも同時に表すことができることから、“総合性動詞”とも稱されるが(楊榮祥 2005:53)、甲骨文の「不」と「弗」はその複数の意味成分のうち、特定の部分を活性化するための否定詞と言えるかもしれない。この意味では、本稿は高嶋氏の否定詞に對する學說—「不」: stative、「弗」: non-stative を一定程度、承認するものである。

3. 「不」、「弗」と狩獵動詞

「不」と「弗」の上の如き意味論的機能論的對立は、表現論的にどのような違いをもたらすのか。本節ではそれを、狩獵事態を表す卜辭から檢證したい。狩獵卜辭では、結果を表す後節で、「不」と「弗」雙方が見られる。例えば、

(86) 壬申王勿 [狩], 不其𠄎 (擒)。 (合集 10407 正) 【賓一】

[壬申の日、我が王は狩獵をすまい。狩獵をしても、獲物を捕られていない (=成果がない) だろう]

(87) 弜罟 (网)⁴² 𧇑鹿, 弗𠄎 (擒)。 (合集 28343) 【無名】

[(我々は) 𧇑地のノロジカを狩るのに罟をしかけまい。罟を仕掛けても、捕獲することはできない]

狩獵動詞の語順について、葛亮 2013:66-67 は、前節が行爲を、後節が結果を表すと分析する。例 (86) を例に取れば、「王勿 [狩]」は狩獵行爲を、「不其𠄎 (擒)」が狩獵結果を表すということである。結果を表す「𠄎 (擒)」に對し、(86) は「不」を、(87) は「弗」を用いているが、本稿の考えでは前者は参照時に「獲物を捕らえられていない」=「成果がない」という結果状

⁴²「罟」字は葛亮 2013:52-53 により、「网」と「罟 (麋)」の合文と或いは専用字と見なした。

態に焦点があり、後者は主語（殷人）の行爲により「鹿」が捕獲されるという結果が発生しないことを表している、分析できる。すなわち、(86)は成果がないことを述べ立てているのに對し、(87)は（直前で言及されている）網をしかけるという方法が、狩獵行爲をする上で効果的ではないことを表現しているのである。

(88) □執鹿，弗卒。 (英國 863) 【賓一】

〔鹿を捕獲しようとするれば、捕獲できない〕

第2節で述べたように、「卒」は狩獵の結果を含意する一方、「執」は狩獵の行爲のみを表すと考えられるが（葛亮 2013）、例（88）では複文の前節で「執」が、後節で「弗卒」が用いられている。これは、「執」で「鹿」を捕らえるという行爲をしようとすることを表すも、後續の「弗」でその行爲により「鹿」が捕獲されるという結果が発生しないことを表しているものと見られる。

次の例は同版に「弗𠄎（擒）」と「不𠄎（擒）」共に見える。

(89) (= (45)) “其于甲迺射柳兕，亡災，𠄎（擒）。”

“弗𠄎（擒）。”

丙午卜，在冒貞：“王其田柳，卒逐亡災，𠄎（擒）。”

“不𠄎（擒）。” (英國 2566) 【黃類】

〔もし甲の日になってから柳（地名）の水牛を弓矢で狩れば、災いがなく、捕らえることができる。／捕らえることができない。／丙午の日に卜い、冒（地名）で檢證した、「王が柳地で狩獵をすれば、獲物を追い終るときまで、災いがなく、捕らえられる。／捕らえられていない（=成果がない）〕

第2辭「弗𠄎（擒）」は主語（殷人）の行爲により「水牛」が捕らえられるという結果が発生しないことを表しているが、第4辭「不𠄎（擒）」では「卒逐」、すなわち「追い終わる」まで「成果がない」という結果状態が際立たせられていると思われる。すなわち、前者は弓矢による方法が狩獵行爲において効果的でないことを述べ立て、後者は始終成果がないという結果状態が残存・繼續していることを述べ立てているのである。

4. 驗辭における「不」、「弗」

これまでの議論は、いずれも命辭が中心であった。これは占いの文言であり、未來を表す。一方、過去を表す驗辭においても「不」、「弗」が見られる。特に「不」が多いことは夙に指摘がある（裘錫圭 1988/2012：321-322）。

(90) 丁卯卜：“今日方至。”不至。 (合集 20470) 【自小字】

〔丁卯の日に卜った、「今日、方國は到着する」と。到着しなかった
／到着していない〕

(91) 貞：“王步。”甲王不步。 (屯南 2224) 【歴二】

〔檢證した、「王は歩いていく」と。甲の日、王は歩いて行かなかった
／行っていない〕

(92) 庚午貞：“辛未敦召方，易日。”允易日，弗及召方。

(合集 33028) 【歴二】

〔庚午の日に檢證した、「辛未の日、召方を伐つとき、天氣が變わる」と。本當に天氣が變わり、召方を捕えることができなかった〕

そもそも、「不」／「弗」の *p-type 否定詞は占ト主體がコントロールできない事態を否定するものであるが、過去のことは人爲的にコントロールできるものではない。このことが、過去時に対し *p-type を用いることを動機づけていると推論できる。

さらに驗辭とは、命辭で卜った事項の結果がどのようなものであるか、を記した文であるから、それは結果状態を前景化する否定詞「不」と親和性が高い。つまり、驗辭の「不 V」はそれを記したときにおいてなお、「不 V」という状態が續いていることを取り立てて示しているものと思われる。

また驗辭には、「不」ほど多くはないものの、例 (92) のような、「弗」が用いられることもある。

この時の「弗」は、主語の行爲に伴うはずの結果が発生するに至らなかったことを表しているのではなからうか。例 (92) で言えば、召方の征伐の際、召方の人々を捕らえようとしたが、天氣の急變で、捕らえるという結果に至らなかった、という理解である。但し、驗辭の「弗」については、なお検討不足の感が否めず、稿を改めて論じたい。

5. 無意志動詞と「弗」

上段で検証してきたように、「弗」は基本的には、主語に立つ名詞が対象に何らかの變化や結果をもたらす直接的行爲を「しない／できない」ことを表す“致使（使役）”の否定である。従って、典型的には「弗」が否定する動詞は意志動詞（volitional verb）であり、主語は動作主ないし使役者である。このほか、楊榮祥 2017:11-12 は、本稿の言うところの非對格動詞を“結果自足動詞”と稱しつつ、意味特徴として自主性を含むことを論じている。

ところが、「弗」が無意志動詞（non-volitional verb）を否定する例がある。

(93) 我弗其受黍年。 (合集 795 正) 【典賓】

[我々は黍の豊作を受けられないだろう]

(94) 王勿比⁴³望乘伐下兗（辯）⁴⁴，弗其受虫（有）又（祐）。

(合集 32 正) 【典賓】

[我が王は望乗と連合して下辯を討つまい、討てばその祐を受けられないだろう]

上の「受」はいずれも「受ける」の意味である。「年」や「祐」は「帝」が否應なく殷に下すものであり、それを受ける殷側の自主性は低い。そのため動詞「受」は無意志動詞に相當し、主語「我」や「王」も嚴密に言えば使役者ではない。また、「祐」や「年（豊作）」を受け取った場合、その結果や影響は殷人のもとに残存するものであったはずであり、否定詞は「弗」よりも「不」の方が相應しいと豫想される。事實、同じ動詞が「不」でも否定される。

(95) 今歲我不其受年。 (合集 9668 正) 【賓一】

[今期、我々は作物の豊作を受けていないだろう]

他にも、無意志動詞は「弗」と「不」、いずれでも否定される。例えば、

(96)a. 子雍友敦，又（有）復，弗死。 (花東 21)

⁴³「𠄎」字が「从」か「比」かは今だ議論があるが、ここでは、林沅 1981:69-74 により、「比」に隸定し、「聯合する」という意味に解釋する。

⁴⁴この地名は従来、「下兗」と隸定されてきたものであるが、趙平安 2000/2009b:7 により、「下兗（辯）」と解した。

〔子雍が救方と友好関係を結び、そことの間を往復することがあるが、死ぬことはない〕⁴⁵

b. 往鳩, 疾, 不死。 (花東 3)

〔(子)が鳩地へ行くと、病にかかってはいるも、死んでいない〕⁴⁶

(97)a. 戊兕弗雉⁴⁷ 王衆。 (補編 8982 = 合集 26879) 【無名】

〔戊(官職名)の兕(人名)は王の衆を失うことはない〕

b. 多射不雉衆。 (合集 69) 【典賓】

〔多射(官職名)は衆を失っていない〕

(98)a. 王弗疾目。 (合集 456 正) 【典賓】

〔王は目を病むことはない〕

b. 不疾。 (合集 13814) 【典賓】

〔病んでいない〕

(99)a. 甫弗其遘舌方。 (合集 6196) 【典賓】

〔甫(殷に屬する人物)は舌方(敵勢力)に遭遇していない〕

b. 于辛省田, 無災, 不遘雨。 (合集 28633) 【無名】

〔辛の日になって狩獵地を視察すれば、災いはなく、雨に降られていない〕

雷煥章 1999 は、直接目的語に變化を生じさせる作用が弱い自動詞の場合、「弗」と「不」は相互に入れ替えられるとする(第1節の(19)参照)。これは重要な指摘であろうが、もう一步踏み込めば、上記の諸例はいずれも主語が何らかの大きな變化を被ったか否かを表したものとも言えるだろう。「受年」、「死」、「疾」はもとより、「雉衆」は主語が「衆」を失ったという被害である。また「遘舌方」、「遘雨」は日本語の被害受け身文に相當し、望ましくない事態を表していると考えられる(Chow 1982: 141)。「受祐」はいい意味での變化である。

「不」は、これまで検証したように、「不+V」がもたらす結果状態の殘存・繼續を表していると思われるが、上例の「不受年」、「不死」、「不雉衆」、「不

⁴⁵ 本例の解釋は朱歧祥 2006: 964 による。

⁴⁶ 本例の解釋は朱歧祥 2006: 959 による。

⁴⁷ 「雉」字の解釋は沈培 2002 による。

疾]、「不遘雨」もまたこの種のアスペクトを表しているものと解釈される。

一方「弗」は主語の目的語に對する働きかけとそれによって生じる結果を否定するものであるが、これは言い換えれば「變化」の否定でもある。「弗」は第2節の(85)で挙げた語彙概念構造によれば、[BECOME]の部分で否定すると考えられるが、これは正に「變化」に對する否定であり、非自主動詞を否定する「弗」はまさに動詞が表す事態のこの種の側面を焦點化しているものと推測される。Takashima 1994: 509も「弗」を“mutative negative (變移性否定詞)”と見なしている。

さて、無意志動詞の意味特徴について馬慶株 1988: 164は、變化や屬性を述べるものであると分析する。この議論を土臺とすれば、以下のような推定も成り立つのではないか。すなわち、もし殷人が無意志動詞の表す屬性や結果状態の面に焦點を當てたならば、否定詞として「不」を用い、變化の面に焦點を當てたならば、否定詞として「弗」を用いた。

6. 「弗」の音節末子音* -tの由來について

甲骨文の「不」と「弗」の對立に關わって、Aldridge 2010とHonkasalo 2013が新たな視點から「弗」の由來を論じていることを第1節で紹介した。

Aldridge 2010は否定詞「不」の後續する動詞の接頭辭*s-が「不」の語末に併合し、不**piuə*+**s*>**piuəs*>弗**piuət*となったと推測する。Honkasalo 2013は殷に先行する時期、否定文の代名詞目的語前置現象である「不+之+V」が頻出したことで、「不+之>弗」という否定詞が誕生したと想定する。さらに「弗」が「我」などの代名詞目的語と共起しないという現象を指摘しつつ、「弗」が代名詞を内包していることが、そのような現象をもたらしたと考える。

本稿ではこの問題について本格的に討論する餘裕はないが、現段階では、筆者は兩氏の見解に否定的である。

例えば、Aldridge 2010は音節末子音で*s->*-tの變化があったことを想定するが、*sは近年の上古音研究では去聲の來源として説明されており、それが*t入聲になるというのはやや想定しにくい。同時に、他動性・使役性

の高い全ての動詞に *s- の音節頭子音があったということも考えにくい。*s- の音節頭子音については以下の學説も關わる。

中古中國語には、音節頭子音の清濁（有聲か無聲か）の違いによって、動詞の意味機能が異なる現象がある。清濁別義と呼ばれ、多くの研究者がこれを上古の形態的な違いに由來するものと考えている。清濁別義について唐・陸德明『經典釋文』は（100）（101）のように説明する。

（100）鄭皇戌使如晉師，曰：“…楚師必敗。” 僦子曰：“敗楚服鄭，於此在矣。”（『春秋左氏傳』宣公十二年）

『經典釋文』：敗楚，必邁反。

〔鄭皇戌は人を晉の軍隊のもとに行かせて言った、「…楚軍は必ず敗れます」と。僦子は言った、「(晉が) 楚を破り、鄭を服従させるなら、正に今です」と。『經典釋文』：「敗楚」は必邁の反。〕

(晉) 敗楚 = X + 敗 + Y (X が Y を敗北させる) = 必邁の反 = 清音聲母 = *prats

楚師必敗 = Y + 敗 (Y が敗北する) = 音注無 = 濁音聲母 = *brats

（101）惠公之季年，敗宋師于黃。（『春秋左氏傳』隱公元年）

『經典釋文』：敗，必邁反

〔惠公の季年は宋を黃で敗北させた。『經典釋文』：「敗」は必邁の反〕

惠公之季年敗宋師 = X + 敗 + Y (X が Y を敗北させる) = 必邁の反 = 清音聲母 = *prats

「敗」の聲母と意味の對立は以下のように整理できる。

（103）敗 *brats (濁音)：敗北する (自動詞)

敗 *prats (清音)：敗北させる (他動詞／使役動詞)

多くの研究者は、この對立を遡らせて、上古音を復元するが、その解釋には出入りがある。例えば、Mei 2012：11-12 は自動詞・濁音を語根 (root) と見なしつつ、清音 = 他動詞／使役動詞に對し、非濁音化を引き起こす causative *s-prefix を想定する。すなわち、

（104）敗 *brads > bwai 'ruined, defeated'

敗 *s-brads > *prads > pwai 'to ruin, to defeat'

一方、Baxter & Sagart 2014：54 は清音・他動詞／使役動詞を語根と見な

しつつ、濁音 = 自動詞に對し、濁音化を引き起こす intransitive *N-prefix (N = 後續の子音の調音點を伴った鼻音) があつたと推定する。すなわち、

(105) 敗 *N-pʰra[t]-s > baejH 'suffer defeat'

敗 *pʰra[t]-s > paejH 'defeat (v.t.)'

このように、上古音研究者の間でも、清濁別義の音節頭子音に對する復元が一致しておらず、従つて、使役動詞に接頭辭 *s- があつたとは必ずしも言い切れない⁴⁸。

さらに言えば、筆者は清濁別義の存在そのものに對し懷疑的である。そもそも清濁別義の代表例として扱われる「敗」、「見」、「別」、「折」は、いずれも本稿の上段で紹介した非對格的振る舞いを見せる動詞であり、その文型の違い——「Y+V」か「X+V+Y」か——から意味的の違いを判別できるもので、そこにさらに音型の違いを想定するのは形態論的、統語論的に redundant である。また、北齊・顔之推『顔氏家訓』音辭篇は、清濁別義について「此其穿鑿耳（こじつけであろう）」と批判している⁴⁹。

このように使役化の接頭辭 *s- の存在が確定できない以上、Aldridge 説は必ずしも首肯できない。

Honkasalo 2013 は上古中期に見える「不+之=弗」という現象を、殷代まで遡らせた解釋である。もし Honkasalo 2013 の解釋が妥當であるならば、甲骨文の「弗」の振る舞いは「不+之=弗」が成立してから相當の時間がたっている、或いは相當に進化したものと言える。というのも、甲骨文では「弗」は目的語を取る動詞としばしば共起でき、原則遵守的ではないからである。一方、多くの場合で目的語を取らない動詞と共起する上古中期の「弗」の振る舞いは極めて保守的であるように見られる。なぜ殷代の「弗」の用法がより先鋭化され、700年を下つた「弗」が保守的かについては、適切な解釋が必要であろう⁵⁰。むしろ、甲骨文の「弗」と上古中期の「弗」が異なる由來を

⁴⁸ この問題については、かつて野原將揮氏（成蹊大學）と共同で「清濁別義」と稱される現象について」という題目のもと、2014年度第1回TB+OC研究集會（2014年7月6日、京都大學）にて研究報告を行った。なおその際、野原氏は Mei 2012 の causative *s-prefix に懷疑的な見解を示していた。

⁴⁹ 清濁別義に對するこれら批判的の見解は大西克也氏（東京大學）よりご教示いただいた。

⁵⁰ この問題について、魏培泉 2001: 179 は、甲骨文と春秋以降の先秦古籍の言語は、直接の繼承

持っていると考えられることもできよう。さらに、西周金文の「弗」も目的語を取ることができ⁵¹、「不+之=弗」を想定しにくいことも考え合わさねばなるまい。

おわりに

以上、甲骨文の非對格動詞の特徴、及び非對格動詞と「不」、「弗」の共起状況から、「不」、「弗」の機能的差異について検証した。

上古中期では「弗=不+之」という併合説が成立するが、甲骨文に代表される殷代中國語では、この説が當てはまらず、「不」と「弗」には上古中期と異なった機能的差異が認められる。

本稿の大まかな結論は以下の通りである。

「不」は、動詞の結果状態（或いは状態パーフェクト）の否定詞であり、先行して発生する動作プロセスの局面は相當程度背景化され、結果残存・繼續の局面が前景化されている；「弗」はVが表す動作によって対象に何らかの變化や結果をもたらすということを否定する“致使（使役）”の否定詞であり、「不」とは異なり、動作プロセスの局面は背景化されていない。

参考文献

大西克也 1988「上古中國語の否定詞“弗”と“不”の使い分けについて」、『日本中國學會報』第40集：232-246, 1988年10月

關係がない方言同士であると認めつつ、中國の政治的中心地は言語接觸が頻繁に起こる地域であるため、言語變化が邊境に比べ速いと考えた上で、甲骨文の言語は政治的中心地と關係が深いから、その變化は速く、一方春秋戰國時代の列國は中心地から離れているため、言語變化が遅く保守的である、という推定を提示する。

⁵¹ 例えば、

弗克伐鄂。 (禹鼎：集成 2833)

〔鄂を討つことができなかった〕

弗敢不對揚朕皇君之賜休命。 (叔夷罇：集成 285)

〔我が君の賜いし美なる命を賞賛しないということはない〕

前者では動詞「伐」が目的語「鄂」を、後者では動詞句「敢不對揚」が目的語「皇君之賜休命」をとっており、「弗」が目的語「之」を併合しているとは見なせない。

- 金杉高雄・岡智之・米倉よう子 2013 『認知歴史言語學』(山梨正明・吉村公宏・堀江薫・
 籾山洋介編 『認知日本語學講座』 第7卷)、東京：くろしお出版、2013年3月
- 工藤眞由美 1995 『アスペクト・テンス體系とテキスト—現代日本語の時間表現—』、東
 京：ひつじ書房、1995年11月
- 島邦男 1967 『殷墟卜辭綜類』、東京：大安、1967年11月
- 高嶋謙一 1989 「殷代貞卜言語の本質」、東京大學東洋文化研究所編 『東洋文化研究所紀
 要』 第110冊：1-166頁、1989年10月
- 高嶋謙一 1992 「太古漢語(10)」、『中國語』：45-48、内山書店、1992年10月
- 寺村秀夫 1984 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』、東京：くろしお出版、1984年9月
- 戸内俊介 2016 『上古中國語文法化研究序説—「于」「而」「其」の意味機能變化を例に—』、
 東京大學博士學位論文、2016年3月
- 中右實・西村義樹 1998 『日英語比較選書5 構文と事象構造』、東京：研究社出版、1998
 年11月
- 森賀一恵 2000 「卜辭の法表現」、東方文化學院京都研究所編 『東方學報(京都)』 第72
 冊：1-16、2000年3月
- 陳劍 2007 〈說花園莊東地甲骨卜辭的“丁”一附：釋“速”〉、陳劍《甲骨金文考釋論集》：
 81-98、北京：線裝書局、2007年4月
- 陳夢家 1956/1988 《殷墟卜辭綜述》、北京：中華書局、1988年1月
- 陳煒湛 1994/2003 〈論殷虛卜辭命辭的性質〉、陳煒湛《甲骨文論集》：154-168、上海：
 上海古籍出版社、2003年12月
- 大西克也 2004 〈施受同辭芻議—《史記》中的「中性動詞」和「作格動詞」〉、高嶋謙一、
 蔣紹愚編《意義與形式—古代漢語語法論文集》：375-394、München: Lincom Eu-
 rope, 2004年
- 大西克也 2009 〈試論上古漢語詞彙使役句的語義特點〉、朱岐祥、周世箴編《語言文字與
 教學的多元對話》：383-401、臺中：東海大學中文系、2009年5月
- 丁聲樹 1935 〈釋否定詞‘弗’‘不’〉、《慶祝蔡元培先生六十五歲論文集》：965-996、北
 平：國立中央研究院歷史語言研究所、1935年1月
- 董作賓 1933/1962 〈甲骨文斷代研究例〉、楊家駱主編《董作賓學術論著》：371-488、
 1962年2月
- 高嶋謙一 2002 〈“賓”字被動用法之考察〉、《古文字研究》第24輯：76-86、北京：中
 華書局、2002年7月
- 高嶋謙一 2013 〈否定詞的詞法〉、黃德寬主編《安徽大學漢語言文字研究叢書 高嶋謙一

- 卷》：147-164，合肥：安徽大學出版社，2013年3月
- 葛亮 2013 〈甲骨文田獵動詞研究〉，復旦大學出土文獻與古文字研究中心編《出土文獻與古文字研究》第5輯：31-153，2013年9月
- 寒峰 1983 〈商代「臣」的身份縷析〉，胡厚宣編《甲骨文與殷商史》：36-59，上海：上海古籍出版社，1983年3月
- 黃天樹 2007 《殷墟王卜辭的分類與斷代》，北京：科學出版社，2007年10月
- 雷煥章 (Lefevre, Jean A.) 1999 〈兩個不同類別的否定詞「不」和「弗」與甲骨文中的「賓」字〉，臺灣師範大學國文系、中研院歷史語言研究所編《甲骨文發現一百周年學術研討會論文集》：47-54，臺北：文史哲出版社，1999年8月
- 雷煥章 (葛人 譯) 2007 〈商代晚期黃河以北地區的犀牛和水牛—從甲骨文中的𠩺和𠩺字談起〉，《南方文物》2007年第4期：150-160，2007年
- 林沄 1981 〈甲骨文中的商代方國聯盟〉，《古文字研究》第6輯：67-92，北京：中華書局 1981年11月
- 林小安 1986 〈殷武丁臣屬征伐與行祭考〉，胡厚宣編《甲骨文與殷商史》第二輯：223-302，上海：上海古籍出版社，1986年6月
- 劉承慧 2006 〈先秦漢語的受事主語句和被動句〉，中央研究院語言研究所《語言暨語言學》7.4：825-861，2006年
- 劉釗 2005 《古文字考釋叢稿》，湖南：嶽麓書社，2005年7月
- 呂叔湘 1941/1999 〈論毋與勿〉，呂叔湘《漢語語法論集（增訂本）》：73-102，北京：商務印書館，1999年7月
- 馬慶株 1988 〈自主動詞和非自主動詞〉，《中國語言學報》第3期：157-180，1988年12月
- 梅廣 2015 《上古漢語語法綱要》，臺北：三民書局，2015年4月
- 裘錫圭 1979/2012a 〈說“弔”〉，裘錫圭《裘錫圭學術文集》第一卷：15-19，上海：復旦大學出版社，2012年10月
- 裘錫圭 1979/2012b 〈殷墟甲骨文研究概況〉，裘錫圭《裘錫圭學術文集》第一卷：20-26，上海：復旦大學出版社，2012年10月
- 裘錫圭 1983/2012 〈釋“𠩺”〉，裘錫圭《裘錫圭學術文集》第一卷：206-211，上海：復旦大學出版社，2012年10月
- 裘錫圭 1986/2012 〈釋“求”〉，裘錫圭《裘錫圭學術文集》第一卷：274-284，上海：復旦大學出版社，2012年10月
- 裘錫圭 1988/2012 〈关于殷墟卜辭的命辭是否問句的考察〉，裘錫圭《裘錫圭學術文集》第一卷：309-337，上海：復旦大學出版社，2012年10月

- 裘錫圭 1990/2012 〈釋殷墟卜辭中的“卒”和“禘”〉, 裘錫圭《裘錫圭學術文集》第一卷: 362-376, 上海: 復旦大學出版社, 2012年10月
- 單育辰 2015 〈甲骨文中的動物之三—“熊”、“兔”〉, 復旦大學出土文獻與古文字研究中心編《出土文獻與古文字研究》第6輯: 69-86, 2015年2月
- 單育辰 2016 〈說甲骨文中的“豕”〉, 李學勤主編《出土文獻》第9輯: 8-33, 北京: 中西書局, 2016年10月
- 沈培 2002 〈卜辭“雉眾”補釋〉, 《語言學論叢》第26期: 237-256, 北京: 商務印書館, 2002年8月
- 沈培 2005 〈殷墟卜辭正反對貞的語用學考察〉, 丁邦新、余靄芹主編《漢語史研究: 紀念李方桂先生百年冥誕論文集》: 191-233, 臺北: 中央研究院語言學研究所, 2005年6月
- 松江崇 2010 《古漢語疑問賓語詞序變化機制研究》, 東京: 好文出版, 2010年2月
- 宋亞云 2014 《漢語作格動詞的歷史演變研究》, 北京: 北京大學出版社, 2014年2月
- 魏培泉 2001 〈「弗」、「勿」拼合說新證〉, 《中央研究院歷史語言研究所集刊》第72本第1分: 121-215, 2001年
- 王蘊智 2004 〈出土資料中所見的“羸”和“龍”〉, 《鄭州師範大學學報(哲學社會科學版)》第37卷第6期: 72-78, 2004年11月
- 王力 1958/1980 《漢語史稿》, 北京: 中華書局, 1980年6月
- 巫雪如 2008 〈從認知語義學的角度看上古漢語的「作格動詞」〉, 《清華中文學報》第二期: 161-198, 2008年2月
- 蕭良瓊 1991 〈「臣」、「宰」申議〉, 王宇信編《甲骨文與殷商史》第3輯: 353-375, 上海: 上海古籍出版社, 1991年8月
- 楊榮祥 2005 〈語義特徵分析在語法史研究中的作用—“V1+V2+O”向“V+C+O”演變再探討〉, 《北京大學學報(哲學社會科學版)》第42卷第2期: 51-59, 2005年3月
- 楊榮祥 2017 〈上古漢語結果自足動詞的語義句法特徵〉, 《語文研究》2017年第1期(總第142期): 11-17, 2017年
- 楊郁彥 2005 《甲骨文合集分組分類總表》, 臺北: 藝文印書館, 2005年10月
- 張玉金 2006 〈論甲骨文中“不”和“弗”的根本區別〉, 東海大學中國文學系編《花園莊東地甲骨論叢》: 127-153, 臺北: 聖環圖書出版, 2006年7月
- 趙平安 2000/2009a 〈戰國文字的“遊”與甲骨文“奉”爲一字說〉, 趙平安《新出簡帛與古文字古文獻研究》: 42-46, 北京: 商務印書館, 2009年12月
- 趙平安 2000/2009b 〈釋甲骨文中的“𠄎”和“𠄎”〉, 趙平安《新出簡帛與古文字古文獻研究》: 3-9, 北京: 商務印書館, 2009年12月

- 周法高 1953/1972 《中國古代語法 稱代編》，臺北：臺聯國風出版社，1972 年
- 周守晉 2005 《出土戰國文獻語法研究》，北京：北京大學出版社，2005 年 8 月
- 朱岐祥 1992 《殷墟卜辭句法論稿—對貞卜辭句型變異研究—》，臺北：學生出版社，1990 年 3 月
- 朱岐祥 2006 《殷墟花園莊東地甲骨校釋》，臺中：東海大學中文系語言文字研究室，2006 年 7 月

- Aldridge, Edith. 2010. Clitic climbing in Archaic Chinese: Evidence for the movement analysis of control. (<http://faculty.washington.edu/aldr/pdf/Control.pdf>)
- Baxter, William H & Sagart, Laurent. 2014. *Old Chinese: A New Reconstruction*. New York: Oxford University Press, 2014
- Boodberg, Peter A. 1934/1979. Note on morphology and syntax I. The final-t of 弗. *Selected Works of Peter A. Boodberg*: 430 – 435, Berkeley: University of California Press, 1979
- Bybee, Joan L, Perkins, Revere & Pagliuca, William. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Language of the World*. Chicago: University of Chicago Press, 1994
- Chow, Kwok-Ching (周國正). 1982. *Aspects of Subordinative Composite Sentence in the Period I Oracle-Bone inscriptions*. Ph. D. dissertation. Vancouver: University of British Columbia, 1982
- Comrie, Bernard. 1976. *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press, 1976 (山田小枝譯『アスペクト』、東京：むぎ書房、1988 年 10 月)
- Comrie, Bernard. 1989. *Language universals and linguistic typology: syntax and morphology (2nd ed)*. Oxford: Blackwell, 1989 (松本克己・山本秀樹譯『言語普遍性と言語類型論』、東京：ひつじ書房、1992 年 5 月)
- Djaouri, Redouna. 2001. Markers of predication in Shang bone inscriptions. *Sinitic Grammar: Synchronic and Diachronic Perspectives* (ed. by Chappell, Hilary): 143 – 171, New York: Oxford University Press, 2001
- Graham A.C. 1952. A probable fusion-word: wuh = 毋 wu + 之 jy, *Bulletin of the School of Orient and African Studies XIV Part I*: 139 – 148, 1952
- Honkasalo, Sami. 2013. Formation of the old Chinese Negatives 弗 *put in the light of Shang dynasty oracle bone inscriptions. *Tokyo University linguistics papers vol.34* (『東京大學言語學論集』第 34 號)：65 – 73, 2013

- Keightley, David N. 1978. *Source of Shang history: The oracle-bone inscriptions of bronze age China*. Berkeley & Los Angeles: University of California Press, 1978
- Mei Tsu-Lin (梅祖麟). 2012. The causative *s-prefix and voicing alternation in Old Chinese and related matters in Proto-Sino-Tibetan. *Language and Linguistics* 《語言暨語言學》 13.1: 1 – 28, Institute of Linguistics, Academia Sinica, 2012
- Nivison, David S. 1989. The “question” question. *Early China vol.14*: 115 – 125, 1989
- Rappaport, Malka & Levin, Beth. 1998. Building Verb Meanings. *The projection of argument: lexical compositional factors* (edited by Miriam Butt & Wilhelm Geuder): 97 – 134, California: CSLI Publications, 1998
- Serruys, Paul L-M. 1974. Studies in the language of the Shang oracle inscriptions. *T'oung Pao vol.60*: 12 – 120, Leiden: E. J. Brill, 1974
- Serruys, Paul L-M. 1981. Toward a grammar of the language of the Shang bone inscriptions. 《中央研究院國際漢學會議論文集 語言文字組》: 323 – 364, 1981
- Takashima, Ken-ichi (高嶋謙一). 1988. Morphology of the negatives in oracle-bone inscriptions, *Computational Analysis of Asian and African Language 30* (『「アジア・アフリカ語の計數研究」共同研究報告 30』): 113 – 133, 1988
- Takashima, Ken-ichi. 1990. A study of copulas in Shang Chinese. *The Memories of the institute of Oriental Culture No.112*: 1 – 135, 1990
- Takashima, Ken-ichi & Serruys, Paul L-M. 2010. *Studies of Fascicle Three of Inscriptions from the Yin Ruin, Volume I & II*, 臺北: 中央研究院歷史語言研究所出版, 2010
- Takashima, Ken-ichi. 2015. *A Little Primer of Chinese Oracle-Bone Inscriptions with Some Exercises*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 2015

引用版本及び略稱

- 龜甲：林泰輔『龜甲獸骨文字』、東京：商周遺文會、1921年
續編：羅振玉《殷虛書契續編》，臺北：藝文印書館，1970年（元1933年）
- 丙編：張秉權《小屯第二本：殷虛文字丙編》，臺北：中央研究院歷史語言研究所，1957 – 1972年
- 合集：郭沫若主編、中國社會科學院歷史研究所編《甲骨文合集》，北京：中華書局，1977年–1982年
- 屯南：中國社會科學院考古研究所編《小屯南地甲骨》，北京：中華書局，1980年–1983

年

英國：李學勤、齊文心、艾蘭編 中國社會科學院歷史研究所、倫敦大學亞非學院編輯
《英國所藏甲骨集》，北京：中華書局，1985年-1992年

花東：中國社會科學院考古研究所編《殷墟花園莊東地甲骨》，昆明：雲南人民出版社，
2003年12月

集成：中國社會科學院考古研究所編《殷周金文集成》第1冊-第18冊，北京：中華書
局，1984年-1990年

左傳：楊伯峻編《春秋左傳注（修訂本）》，北京：中華書局，1990年5月

史記：《史記》，標點本二十四史，北京：中華書局，1997年11月

戰國策：《戰國策》，上海：上海古籍出版社，1978年5月

孟子：十三經注疏整理委員會整理《十三經注疏整理本 孟子注疏》，北京：北京大學出
版社，2000年12月